別記様式第２号

平成２９年度
宮城県
NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした
復興・被災者支援事業
評価報告書

都道府県担当部局	（窓口） 環境生活部共同参画社会推進課 NPO・協働社会推進班 担当者氏名　工藤あかり 電話番号　０２２-２１１-２５７６ メールアドレス　kyoshan@pref.miyagi.lg.jp

１．事業の成果目標の達成状況

番号	成果目標		達成状況	
	項目	目標（値）	達成状況	達成状況に関する説明等
1	NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合	70%	86.4%	目標を達成し、NPO 等による取組が受益者にとって有益であったといえる。
2	NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興･被災者支援を実施または実施に関わった団体数	延べ 20 団体	延べ 76 団体	目標を達成し、復興・被災者支援の取組の波及、継続に資するものであったといえる。
3	復興･被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化により支援を行うＮＰＯ等の数	延べ 20 団体	延べ 171 団体	目標を達成し、絆力の強化による、きめ細かな復興・被災者支援の継続的な実施に資するものであったといえる。

２．事業実施結果

２－１．総括表

交付対象事業		県が実施した事業内容 （名称と実施主体）	事業費 （円）	国費 （円）	県費等 （円）	「1.事業の成果目標」との対応（番号）
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援	①被災者の心のケア、健康・生活支援に向けた取組	（名称） 持続可能な支援体制構築へ向けた組織・施設リノベーション （実施主体） 特定非営利活動法人奏海の杜	5,156,771	3,437,847	1,718,924 (530,771)	1・2
		（名称） 人材育成・震災７年の記録紙発行 （実施主体） 特定非営利活動法人仙台傾聴の会	5,172,996	3,448,664	1,724,332 (517,996)	1・2
		（名称） 地域の多様な担い手による移動と暮らしの「総力戦」への取り組み （実施主体） 特定非営利活動法人移動支援 Rera	10,313,111	6,875,407	3,437,704 (1,313,111)	1・2
		（名称） 育児中の母親と地域社会の絆をつなぐインターンシップ事業 （実施主体） 特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク	4,408,963	2,939,308	1,469,655 (455,963)	1・2
		（名称） 『いしのまき高校生『絆力』向上プロジェクト』 （実施主体） 特定非営利活動法人 Switch	3,928,236	2,618,824	1,309,412 (393,236)	1・2
	①被災者の心のケア、健康・生活支援に向けた取組 ②コミュニティ形成等の復興に向けた取組	（名称） 亘理山元地域コミュニティ復興事業 （実施主体） 特定非営利活動法人亘理いちごっこ	7,111,709	4,741,139	2,370,570 (711,709)	1・2
		（名称） 仮設住宅コミュニティ維持／復興公営住宅コミュニティ形成と共助的見守り推進事業 （実施主体） 一般社団法人石巻じちれん	7,667,435	5,111,623	2,555,812 (792,435)	1・2
	②コミュニティ形成等の復興に向けた取組	（名称）地域コミュニティにおける、はじめの一歩サポート事業 （実施主体） 特定非営利活動法人とめタウンネット	6,427,750	4,285,166	2,142,584 (647,750)	1・2
		（名称）NPO・小中高校・行政と連携した南三陸町の復興人材育成事業 （実施主体） 特定非営利活動法人キッズドア	5,573,722	3,715,814	1,857,908 (557,722)	1・2

		（名称） 住民主体の復興の町づくりに向けた市民活動ネットワーク「はまのわネット」支援事業 （実施主体） 特定非営利活動法人レスキューストックヤード	2,580,367	1,720,244	860,123 (258,367)	1・2
		（名称） 南三陸町における高校生の主体的な地域活動を促進する環境づくり事業 （実施主体） 認定特定非営利活動法人底上げ	6,314,783	4,064,000	2,250,783 (2,250,783)	1・2
	④中間支援の取組	（名称） 被災地・地域活動団体ガイドブック2018作成事業 （実施主体） 特定非営利活動法人地星社	3,218,666	2,145,777	1,072,889 (322,666)	1・2
		（名称）子供たちに社会で生きる力を！「‘志’教育コーディネーター」育成事業 （実施主体） 特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク	5,149,005	3,432,670	1,716,335 (1,309,005)	1・2
	小計（a）		73,023,514	48,536,483	24,487,031 (10,061,514)	

	交付対象事業 県が実施した事業内容 （名称と実施主体（委託先））	事業費 （円）	国費 （円）	県費 （円）	「1.事業の成果目標」との対応（番号）
(2)復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化	（名称） ＮＰＯ等の絆力を活かした復興支援事業（マッチング・交流事業）業務 （実施主体（委託先）） 特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる	3,733,560	2,489,040	1,244,520	3
	（名称） ＮＰＯ等の絆力を活かした復興支援事業（情報収集・提供事業）業務 （実施主体（委託先）） 特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる	2,998,728	1,999,152	999,576	3
	（名称） 宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業受益者アンケート業務 （実施主体（委託先）） 特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンター	199,800	133,200	66,600	3
	（名称）審査委員会運営，事業実績確認等 （実施主体）審査委員会，宮城県	189,332	126,221	63,111	3
	小計（b）	7,121,420	4,747,613	2,373,807	

合計（a＋b）	80,144,934	53,284,096	26,860,838 (10,061,514)	

２－２．各事業の成果
（１）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－１
事業名	持続可能な支援体制構築へ向けた組織・施設リノベーション
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人　奏海の杜 【参画した団体（ＮＰＯ等）】 NPO 法人麦の会（見学受け入れ）、NPO 法人多夢多夢（見学受け入れ）、NPO 法人サンサンファクトリー（見学受け入れ）、NPO 法人出発のなかまの会（支援方法指導）、一般社団法人旅籠まつしま香村（見学受け入れ）、一般社団法人 big tree（会議プランニング）、社会福祉法人そうそうの杜（支援方法指導） 【参画した団体（ＮＰＯ等以外）】 生涯発達支援塾 TANE（カフェ講師派遣）、NPO サポートあの屋（カフェ講師）、わっかの会（カフェ参加者）、笑がおの会（参加者）、地域デザインラボ（ワークショッププランニング）、株式会社エスカ（会議プランニング）デザインバル（会議参加者）
実施期間	平成２９年７月７日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【課題・背景】 震災前の活動地域は、障害児の福祉サービスがなく、学童保育でも障害児が受け入れられておらず、地域住民間で送迎や見守りを行うなど、地域のつながりで生活を成り立たせていた。 しかし、震災で多くの人が住居を失い、避難所や仮設住宅での暮らしを経て公営住宅へと人々は暮らしの舞台を転々とし、生活の拠点を何度も移す中、地域のつながりは希薄となった。第三者の手を必要とする障害児の保護者の方々は周りへの遠慮を感じており、地域内にまだ頼る先を見いだせていない。さらに、被災した障害児への心のケア等の支援には、茶話会やイベントの開催などの一般的な被災者支援とは異なる専門的な技術や配慮が必要であるが、被災による人口減少により、障害理解のある支援者不足が一層深刻である。 【事業内容】 震災により頼るところがなくなってしまった障害児・保護者の方々の心のケアや生活支援のため、地域住民の障害理解や支援意識の浸透を進めながら、地域で支え合う関係を障害児を中心に据えて再構築し、持続可能な支援の形を作る。

①施設リノベーション

震災による人口減少が甚だしく担い手が圧倒的に不足している地域で、質の高い支援を続けるためには、支援者も被支援者もなく皆が地域の住民として、お互いが出来る範囲を出し合って支え合うフラットな関係を創ることが重要である。障害当事者も「支援される人」ではなく「共に地域を作る人」と位置づけ、まずは自分たちの場所を自分たちで作ることから始めた。

〇壁、パーティション：自然色に塗り替え

感覚過敏に配慮。自分が居やすい色に、自分たちで塗る。

〇床：プロの力も借り、木材で床をはって、みつろうワックス、毎日の床掃除などのメンテナンスを自分たちで実施。

〇ソープディスペンザー：1回押すと一定時間でて来ないしくみ

自閉症は「終わり」が難しい。何度も押して、なくなるまで押し続けてしまうことを、人から止められるのではなく、自分で気づける仕組みを自分たちで作った。

②コミュニティカフェの開催

震災による人口減少で、2015年10月の国勢調査では南三陸町は人口が29%減である。特に働き手世代の流出が甚だしい。障害者福祉分野でも担い手不足が深刻である。そういう地域にあって質の高い支援を続けるためには、地域の障害理解と、支援者・被支援者の関係を超えて共に支え合う関係作りが必須であるという課題感のもと、地域に広く開けたコミュニティカフェ（にこカフェ）を定期的に開催した。

実施にあたっては、敷居を低くし、気軽に発達障害や子育て支援について学べる場づくりをした。といっても、特別に「障害」を学ぶ場ではなく、子育て自分育ちの延長として「障害」というレベルもあるというグラデーションを意識して設定している。13回行い、のべ215名の方が参加してくださった。

開催日	内容	参加人数
7月19日	ミュージックケア	13
8月18日	夏祭り（食育：踊るペットボトルピザ）	50
9月13日	救命救急	12
10月11日	作業療法士による五感、固有覚について他	12
11月8日	行動の理由を考えよう	19
11月29日	ファンドレイジング・募金活動	6
11月30日	NPOの資金について	8
12月6日	療育の場におけるアートの意味（草木染め）	22

12 月 26 日	親子そば打ち体験	18
1 月 17 日	作業療法士によるこどもの発達について	27
2 月 7 日	アートセラピー（画材で自己表現）	19
2 月 10 日	夢語り会（子どもの将来座談会）	12
3 月 7 日	自分の育て方（自己理解）	24

③地域の障害児支援の核を作る

地域は、もともと障害者福祉に関わる人が少ないうえに、震災による人口減少が甚だしく、支援者不足が深刻で、募集をしてもなかなか担い手が集まらない現状である。そこで、②のコミュニティカフェ活動をとおし、地域の中から支援者を育成するため、地域住民が障害についての理解を深め、支援の担い手となれるよう、適切なサポートを行う目的でワークショップを行った。

7 月から毎月 1 回、1 月には 2 回行い、全部で 10 回開催した。

開催日	内容
7 月５日	お互いを知ろう
8 月 25 日	奏海のことを知ろう
9 月 22 日	奏海の未来像を考えよう
10 月 27 日	座談会/巡業の企画を立てる
11 月 15 日	募金について考えよう
12 月 13 日	募金大作戦！
1 月 20 日	仕事について考える
1 月 21 日	座談会/巡業の企画を完成させる
2 月 23 日	座談会振り返り 講演会の企画を立てる
3 月 14 日	一年の活動の振り返り

④地域連携会議の開催

震災により、これまでの地域コミュニティが崩壊し、地域住民がそれぞれ自力再建、仮設住宅から復興住宅への移転、他地域に移転など、新しい生活を余儀なくされた。新しい地域コミュニティにおいて、障害者福祉事業の枠を越えて、地域全体で支えあい、持続する仕組みを作るための作戦会議を行った。

開催日	
7 月 11 日	地域資源について情報共有
8 月 21 日	コミュニティカフェのあり方について
9 月 8 日	障害者の就労と地域交流について
10 月 10 日	地域の仕事について

	11 月 10 日　　就労場所作りについて 1 月 5 日　　農業とのコラボレーションについて 1 月 31 日　　企画会議（作物について） 2 月 7 日　　企画会議（作物について） 2 月 14 日　　企画会議（スケジュールについて） 3 月 24 日　　企画会議（連携先について）
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 5,156,771 円 （国費 3,437,847 円、県費 1,188,153 円、実施主体 530,771 円） 【内訳】 人件費 3,600,000 円、諸謝金 1,103,376 円、消耗品費 453,395 円
具体の成果	①　施設リノベーション ・活動場所の壁とパーティションを自然色に塗り替え、感覚過敏に配慮した。そのため、震災で生活環境がかわり精神状態が不安定だった障害児は格段に情緒が安定し、穏やかに過ごせたり、集団活動に取り組めたりするようになった。 ・床に木材をはり、ワックス塗りなどのメンテナンスを障害児が行えるようにした。同じ作業を共にすることでコミュニケーションを密にとり、心のケアに努めたことで、自分たちの場所を自分たちでメンテナンスすることに意欲的な子どもが増えた。 ・ソープディスペンザーを自作したため、「終わり」を人から言われることなく自分で気づくことができるようになり、自分で完結できるようになった。自立への大きな一歩である。 ・全体的に活動場所は使いやすく明るい雰囲気になった。そこで楽しげに活動を続ける子ども達の姿を見ることが心の癒しになると、保護者の方々が、慌ただしく先の見えない生活再建に取り組む中でも時間をつくり、訪問される頻度が上がった。 ②コミュニティカフェの開催 ・13 回開催、のべ 215 名の方が参加。 ・リピーターも多く、ざっくばらんに主体的な話ができる雰囲気ができており、地域が連携して支援することのイメージが共有できてきたとの手応えを感じている。参加者からは「ガッチリした座学ではなく気軽な雰囲気で学べることで、障害理解へのハードルが下がった」「毎回興味深い内容で理解の幅が広がっている」「震災により生活が一変して気分が塞ぎがちになるが、

	日常を離れて過ごせる時間ができてホッとする」「定期的に行くところができて嬉しい」などの感想をいただいた。回を重ねるごとに参加者が増えた。 ・障害児と地域住民間の交流の場となり、双方の心のケアに寄与した。 ③地域の障害児支援の核を作る ・7 月から毎月 1 回、1 月には 2 回行い、全部で 10 回開催。 ・このワークショップにより地域の未来像や地域理解を得ることについて共通の認識ができ、地域へ向けて障害理解を促し、未来像を一緒に考えるイベントを開催した。 ・震災により不都合が多くなった障害児を取り巻く生活環境を改善するための取組を再考するきっかけとなった。 ④地域連携会議 ・7 月から毎月 1 回、12 月は都合が合わず休み、1 月 2 月は 2 回、全部で 10 回開催。 ・集まった事業者で話し合いを重ね、障害者福祉の視点で地域づくりをする業種として農業に決めることができ、継続できる具体的な仕組み作りに着手できた。 ・参加した方々の、震災で壊れてしまった地域の関係を再構築し、心身ともに健康を取り戻そうという気概が高まった。
平成 30 年度以降の活動計画	活動場所を障がい特性に配慮した場所に改装し、当事者やスタッフの意識改革が進んだ。来年度以降は、地域全体で支援する仕組み創りを加速させる。 １）地域の障害理解を図る活動の継続・・・より積極的に関わる 〇コミュニティカフェの継続：参加者が友人を連れて来て、口コミで輪が徐々に広がって来ていると実感している。これまでは主に発達障害に特化して内容を組んでいたが、法人理念の「障がいがあってもなくても誰もが自分らしく暮らせる地域」に沿って、一般則の話も入れつつ、引き続き障害を特別視しない雰囲気づくりをしていく。 〇巡業：ハロウィンの仮装行列をした時にたまたま近所のデイサービスの方々の帰宅時間に重なり、参加者にとても喜ばれた。双方にとってプラスのことがあると感じている。来年度はより積極的に高齢者施設を回る。 〇OPEN デイの開催：オープンキャンパスのようにイベントを開催し、奏海の杜の活動を見ていただく機会を作って、参加しやすい雰囲気を作る。 ２）スタッフと地域の方々の意識改革・・・顔を付き合わせることを大切に 〇講演会・座談会：肉声での発信、「会う」ことを大切にする。 〇ボランティア受け入れ：障害児に慣れていない方の振る舞いが、子どもを混乱させることが多く、受け入れに尻込みしていた。スタッフの支援力が

	上がった（自信がついた）ことから、受け入れを進めていきたい。 ○「かなプロ」プロジェクト：地域の方に自分の得意分野で子ども達と関わってもらい、障害児支援ができる色々な分野のプロボノを育てる。第一段階として支援環境は奏海の杜で整え、地域の方々が障害児に関わる機会を多く作り大人にも成功体験を積んでいただく。そして将来的には、かなプロが特別なことではなく、地域で障害児を育てる環境ができることが目標芸術、農業、英語、音楽などでかなプロの受け入れを考えている。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は７団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果

（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－２
事業名	人材育成・震災 7 年の記録紙発行
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】NPO 法人仙台傾聴の会 【参画した団体（ＮＰＯ等)】石巻復興きずな新聞舎、利府傾聴ボランティア、白石市アイキララ、美里町うさぎの会、大和町よりそい、登米市傾聴ボランティア、塩釜市社会福祉協議会、富谷市社会福祉協議会、柴田町社会福祉協議会、亘理町社会福祉協議会、大和町社会福祉協議会（講座開催協力） 【参画した団体（ＮＰＯ等以外)】イオンモール名取店、山元町包括支援センター、栗原市、登米市、岩沼市健康推進課、鶴ケ谷市民センター、岩沼市シルバー人材センター（講座開催協力）
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	1 人材養成として ①「傾聴ボランティア養成講座」県内 8 か所で開催。延べ 368 名養成 7/6,13,20 日大和町「傾聴ボランティア養成講座」開催、参加者延べ 54 名 10/6,13,26 日「傾聴ボランティア養成講座」仙台市福祉プラザ延べ 45 名参加。 10/14,21 日「傾聴ボランティア養成講座」塩釜市社協にて、延べ 36 名参加。 10/16 日「傾聴ボランティア養成講座」柴田町社協にて、20 名参加。 10/27 日　イオンモール名取養成講座　イオンモール名取ホールＢ参加者 10 名 11/13 日「傾聴ボランティア養成講座」柴田町社協にて 2 日目、22 名参加。 11/17 日「傾聴ボランティア養成講座」イオンモール名取 2 日目、参加者 8 名。 11/23、26、12/3「傾聴ボランティア養成講座」亘理町中央公民館にて、参加者延べ 60 名。 12/11 日「傾聴ボランティ養成講座」3 回目柴田町社協にて、参加者 25 名。 12/15 日「傾聴ボランティア養成講座」3 回目名取市市民活動支援センターにて（イオンモール名取が使用不可になった為変更）参加者 8 名。 2/2,9,16 日「傾聴ボランティア養成講座」利府町にて延べ 39 名参加。 2/11,12 日　「石巻市傾聴ボランティア養成講座」延べ 41 名参加。

	②出前「傾聴基本講座」県内 13 か所で開催。参加者 423 名 7/11 日仙台市消費生活パートナー養成講座にて「傾聴基本講座」参加 10 名。 7/12 日泉区八乙女社協「民生委員向け基本講座」参加者 34 名。 10/4 日鶴ケ谷市民センター「傾聴基本講座」参加者 21 名 11/21 日「傾聴基本講座」大倉地域包括支援センターにて、参加者 17 名。 12/14 日「傾聴基本講座」栗原市ゲートキーパー養成研修、参加者 36 名。 12/18 日「傾聴基本講座」利府町ゲートキーパー研修会、参加者 18 名。 1/18 日「傾聴基本講座」栗原市ゲートキーパー養成研修 2 回目参加者 30 名 1/19 日　岩沼市健康推進課講座、総合福祉センターにて参加者 10 名 2/5 日　大沢地区社会福祉協議会「心の健康」参加者 30 名 2/9 日　大衡村社協「基本講座」参加者 50 名 2/14 日　七ヶ宿町社協「基本講座」参加者 12 名 2/23 日　仙台市豊齢学園「基本講座」仙台市シルバーセンターにて参加者 120 名 3/26 日　岩沼市シルバー人材センター講座、参加者 35 名 ③　支援者のための「スキルアップ研修」を年 6 回開催、参加者 214 名 7/20 日新人フォローアップ研修実施、福祉プラザ 10Ｆ2 研にて参加者１０名。 12/1 日会員全体会研修　仙台市福祉プラザにて、参加者 88 名 12/21 日　「新人フォローアップ研修」2 回目実施、参加者 16 名。 1/27 日　スキルアップ、リーダー研修・午前、午後の 2 回 仙台市福祉プラザにて参加者 27 名 2/25 日　会員スキルアップ研修「個人宅現任研修」参加者 23 名 3/24 日　会員スキルアップ研修「こころの健康を保つためには」参加者 50 名 ④「傾聴入門講座」年 3 回開催　参加者 71 名 7/14 日「傾聴入門講座」開催、イオンオール名取にて参加者１２名。 8/6 日、傾聴ボランティア入門講座開催、仙台市福祉プラザにて参加者２２名 3/11 日「傾聴入門講座」仙台市福祉プラザ第 2 研修室、参加者 37 名 2 みやぎネットワーク研修 7 か所で開催、参加者 133 名

	9/5 日ネットワーク交流研修会実施、登米市迫公民館にて、参加者 7 名。 9/11 日ネットワーク交流研修会実施、白石市総合福祉センター参加者 17 名 10/24 日ネットワーク交流研修会実施　山元町坂元公民館にて、26 名参加。 10/31 日ネットワーク交流研修会実施、富谷市社協にて、26 名参加。 11/7 日ネットワーク交流研修会実施、美里町社協にて、23 名参加。 11/30 日ネットワーク交流研修会実施　大和町社協、参加者 12 名。 1/26 日　奥州市傾聴ボランティアおうしゅうの会員との交流研修参加者 22 名 3 震災 7 年の記録紙発行 　震災から 7 年の「心の復興」はどのような状況になっているのか、傾聴ボランティアの視点から考える。 平成 30 年 3 月 11 日「心の復興Ⅱ」A4 版 92 ページ、2000 部発行 3/15 日の県　絆力報告会のメディアテークにて 30 部配布した。 また、地元新聞に掲載頂き、かなりの問い合わせを頂いた。 4 広報のための会報誌発行　年 3 回発行 「傾聴」の普及啓発、賛助会員などへの広報として発行した。 7/1 日傾聴だより 25 号 2000 部発行 11/1 日　傾聴だより 26 号 1200 部発行 3/1 日　傾聴だより 27 号 1200 部発行
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 5,172,996 円 （国費 3,448,664 円、県費 1,206,336 円、実施主体 517,996 円） 【内訳】 人件費 3,159,240 円、旅費 301,975 円、消耗品費 367,506 円、印刷製本費 1,171,036 円、通信運搬費 94,807 円、使用料及び会場借料 33,000 円、委託費 45,432 円
具体の成果	・人材養成としての「傾聴ボランティア養成講座」は、県内 8 か所で開催、延べ 368 名の参加者、「基本講座」には 13 か所 423 名の参加者であった。この数字は傾聴の普及啓発の一定の成果といえる。また、これらの講座を身近な各地域で開催することで気軽に参加できる方の増加となり、地域の支え合う人材の増加に繋がったと思われる。さらに、この講座の参加者には被災者も含まれており、この方々が地域の中で「傾聴」活動を行うこと

	で生きがいに繋がり、被災者が前に進むための第１歩が踏み出せる効果に繋がったと思われる。また、地域住民のボランティア意識の高揚にもなり、地域の活性化、地域の孤立する人達へ寄り添う人材の増加に繋がった。それが孤立防止、自死予防になると思われる。そして、被災された高齢者等が支えられるだけではなく、支えるボランティアとして活動することで元気な高齢者の増加になり、介護予防につながる効果となる。 ・各地域の「傾聴ボランティア団体」へ交流研修を実施することにより、質の高い傾聴力を身につけることで、被災者等孤立する人への対応の向上につながったと思われる。 ・被災者等を支える側の「傾聴ボランティア」も聴く力の向上のために「スキルアップ講座」は必要であり、相手に寄り添うことが出来る人材の育成効果となった。 ・新人フォローアップ講座では新人の育成を丁寧に行うことで、ボランティア活動人材の定着、増加に繋げている。
平成 30 年度以降の活動計画	・子育て中の母親などへも傾聴を伝えていく。 ・企業との連携も視野に入れながら、協力体制を探していく。 ・賛助会員の増加を考えていく。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が７割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は１１団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

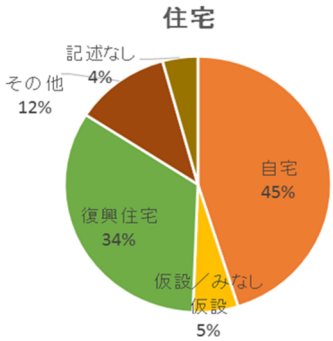
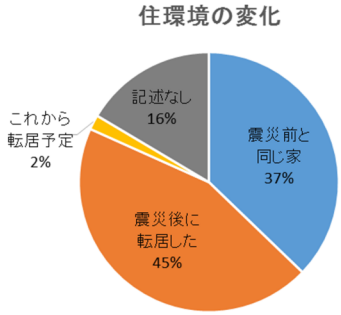
２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

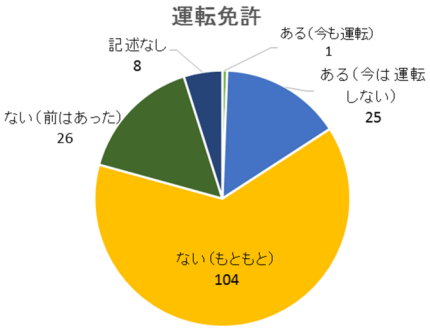
整理番号	（１）－３
事業名	地域の多様な担い手による移動と暮らしの「総力戦」への取り組み
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人　移動支援 Rera 【参画した団体（ＮＰＯ等)】ST ネット北海道、関西 STS 連絡会、NPO 法人活きる、東日本大震災を乗り越える親子の記録・三陸こざかなネットワーク
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【事業内容】 ■外出手段を持たず様々な困難を抱える住民に向けた、見守りを兼ねた送迎活動 ・震災直後から石巻地域の移動困難者に寄り添い送迎活動を行ってきた当団体の関係性を活かし、歩行困難者の乗降や車いす・ストレッチャーの介助を含むさまざまな状況に合わせた送迎と同時に、利用者一人一人の様子に個別に配慮し、状況に応じて必要な支援機関との連携体制を構築。 ・必要に応じて個別の困難要素を把握、送迎時に気になる症状等があれば団体内で共有し、セーフティネットとしての役割の一端を担った。 ・スタッフは送迎の技術向上と、見守り支援に必要な知識習得に努めた。 ・自治体や地域包括支援センター、社会福祉協議会、生活困窮者や障害者、高齢者などの支援機関との連携体制を強化し、それぞれの抱える「移動」と「くらし」のさまざまな問題解決に協働で取り組む体制づくりを進めた。 ■利用者向け情報紙の発行と地域住民・支援者への情報発信 ・利用者・支援者・団体スタッフ・ボランティアを対象とした通信紙を作成した。 ・通信紙は送迎の車内で配布するほか、同じものを当団体の支援者にも郵送し、活動の現場感や情報を共有するツールとして役立てた。 ・地域住民や支援者に向けて、移動支援活動の内容やボランティア募集、講習会、研修受け入れ、サポーター募集等の情報をウェブページ上で発信した。 ■外出する機会の少ない移動困難な住民のための、付き添いつきお出かけ送迎 ・ドア・トゥ・ドアの送迎だけではなかなか買い物やお出かけを叶えることの難しい利用者のために、介助・付き添いつきのお出かけ送迎を開催した。

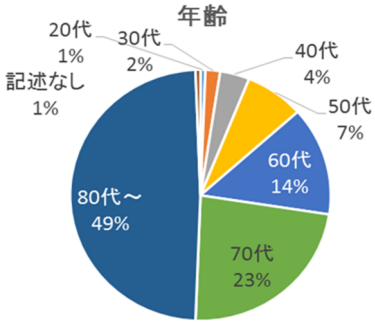
	・送迎が休みの日曜日を活用し、毎月1回～2回開催した。 ・内容によって参加者の層が変わるため、買い物、温泉、墓参り等、利用者のニーズを聞きながら様々なプログラムを実施した。 ・ボランティアスタッフとして、当団体への寄付者や支援者などにも広く声がけを行い、普段ほとんど接する機会のない「支援者」と「受益者」が顔を合わせ、互いを知る場としても活用した。 ■移動と合わせて様々な暮らしの不便を抱える住民のためのミニ生活支援 ・送迎前後の10分間程度を利用して、草取りや掃除等を手伝う「ちょこっとお手伝い」の計画を進めていたが、検討会議を進める中で方針を変更。送迎の合間ではなく生活支援専門の“別働チーム”として独立した支援を行うこととした。 ・担当スタッフと事務局によるニーズ聞き取りやスタッフ研修でのアイディア出しなどを行い、次年度から本格始動できるよう準備を進めた。 ■地域の担い手育成のための『福祉送迎講習会』の開催 ・石巻圏域の住民、施設職員、ボランティア、復興支援活動を行う者などを対象に、移動困難者の安全な介助と運転、関連する法律や制度、県内の移動支援活動について等を学ぶ講習会を開催した。 ・異なるプログラムで、座学と実習を組み合わせた講習会を全3回シリーズで開催。1回のみ受講も可。全回を受講した方に、国土交通大臣認定の福祉車両等運転協力者の修了証を交付した（交付団体：NPO法人移動サービスネットワークみやぎ）。 ・講師は県内外で活躍している実績ある送迎団体に依頼し、当団体が企画、運営、当日の講師のサポートを行った。 ■送迎を行うNPOのための、送迎実習受け入れプログラム作成 ・地域で支援活動を行うNPOなどで、利用者の送迎を検討している、あるいはすでに行っている組織のスタッフを対象に、個別の送迎実習の受け入れと、そのためのプログラムを作成した。 ・実習は当団体で1日～2日程度のプログラムで、実際の送迎に同行する。運転、車両のメンテナンス、リスク管理、接遇、介助等、必要な実習を修了した者に修了証を発行した。 ・当団体のスタッフで実習内容を話し合った。今後マニュアル文書化していく。

	■移動支援活動のノウハウを紹介する冊子の作成 ・これまで当団体が培ってきた送迎支援活動の仕組みを紹介し、地域や他団体での移動支援活動に役立ててもらうための冊子を作成した。 ・内容は『災害編』『資料編』の二部構成となっており、『災害編』では、災害発生直後から日常生活の中での支援までの状況の変化、ニーズの移り変わりなどを紹介。『資料編』では日常での移動支援を行う際に必要な知識や仕組みなどを紹介した。 ・災害支援関係者や移動サービスなどの関係者の協力を得て作成した。 【スケジュール】 7月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（体操・お茶っこ） 行政、支援機関等との意見交換 石巻専修大学復興ボランティア学ワークショップ開催 スタッフ研修 8月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（買い物） 南三陸町まちづくり団体視察受け入れ すばらしいみやぎを創る協議会研修会事例報告登壇 スタッフ研修 9月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎2回開催（墓参り・墓掃除と歌っこお茶っこ） 東京都千代田区社会福祉協議会より視察・学生ボランティア受け入れ暮らしと移動の情報交換会開催 石巻市地域包括支援センター合同ケア会議出席 スタッフ研修 10月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（買い物） 石巻NPO連絡会議に参加 スタッフ研修（合宿） 『JCN現地会議in宮城』パネルディスカッション登壇 『移動・外出を多様な生活支援サービスで推進するセミナーin山形』参加 『くらしの足をみんなで考える全国フォーラム』（東洋大学）参加

	11 月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（日帰り温泉） 福祉送迎講習会（第 1 回・第 2 回） 『おでかけ交通博 2017in 北上』参加 東北学院大学地域共生推進機構ＣＳＷ公開研究会事例発表 スタッフ研修 12 月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（買い物） 福祉送迎講習会（第 3 回） トヨタモビリティ基金・現代文化研究所ヒアリング受け入れ 石巻公共交通及び交通検索サイトモニターイベント開催 スタッフ研修 1 月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（カラオケ・お茶っこ） NTT ドコモ取材受け入れ 復興庁『新しい東北』官民連携イベント登壇 『かぜのたより』発行 スタッフ研修 2 月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（買い物） JCN 現地会議 in 東京、in 大阪　登壇 JVOAD 取材受け入れ（災害時の連携について） 日本ファシリテーション協会東北支部例会に登壇（組織づくり） 東北運輸局訪問、活動内容共有 スタッフ研修 3 月　送迎支援（日曜・研修除く毎日） 付き添いつきお出かけ送迎（墓参り・墓掃除） 持続可能な暮らしの足を考えるフォーラム in 東北　開催 国土交通省パブリックコメント提出 送迎ノウハウ集約冊子完成 スタッフ研修
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 10,313,111 円 （国費 6,875,407 円、県費 2,124,593 円、実施主体 1,313,111 円）

	【内訳】 人件費 7,484,679 円、諸謝金 741,404 円、旅費 368,970 円、消耗品費、235,967 円、印刷製本費 219,355 円、通信運搬費 71,804 円、使用料及び会場借料 146,392 円、委託費 1,044,540 円
具体の成果	**【課題・背景と事業目的】** ≪道半ばの復興・不安定な住環境≫   2018 年 1 月　アンケート集計結果より ・震災発生から 7 年目となった当年度は、当事業の対象者を含め、仮設住宅の住民の多くが復興住宅や自宅再建などで住環境が大きく変わる年となった。被災した住民の環境の個別化・多様化が進み、一人一人異なる課題や状況に丁寧に関わる必要性が出てきた。同時に「外から見えにくい」環境となり、より注意深くきめ細やかな見守りが必要となっている。 ・本事業の受益者となる移動困難な住民は、地域との関わりが薄く支援者からも見落とされがちであるため、「移動手段」を提供する活動を通じた見守りや他機関との連携によって、移動だけでなく“暮らし”そのものを支えるという目的がある。 ≪高齢化の進行と免許返納の不安≫ ・震災によって、従来から進んでいた人口減少が加速する一方、高齢人口は増加。高齢化率は上昇を続けている。当団体による送迎利用者も、高齢者の割合が非常に高く、また免許をもともと持っていないか返納した方、持っているが運転をやめた方がほとんどとなっている。自分で運転できない状況というのは、すでに自力での外出の困難な心身の状況や年齢となっている。こうした住民の安心できる外出手段の提供が必要である。





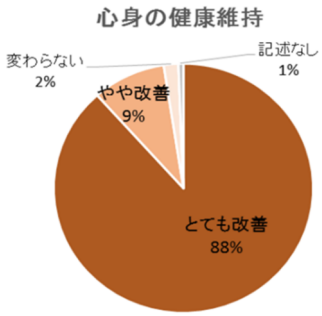
≪重層化する困難要素≫

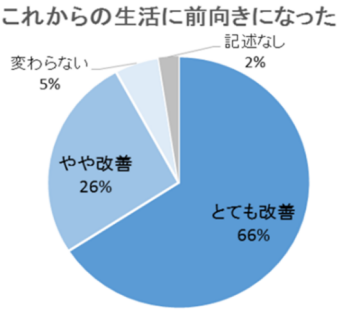
・移動に困っている住民は、重複してさまざまな困難要素を抱えている。病気や障害の問題、家族の問題、経済的な問題、引きこもりや孤立など。そういった方々に「移動」を通じてつながり、抱える課題の全体像を連結させる。

・病院以外に外出目的を持たない、活動意欲が低下してしまっている利用者も多く見られる。付き添いつきのお出かけ送迎を定期開催し、外出する目的を持ち心豊かな生活を送るための手助けをする。

≪“総力戦”の必要性、日本全体の課題≫

・移動手段の確保は、前述してきた通り、人生の“オプション”ではなく生きていく上で必要不可欠な“ライフライン”である。移動困難者や支援者、公共交通という考え方を越えた、地域全体で守っていく連携体制が必要である。社会全体で移動を考える基盤作り、そして移動の「担い手」を地域に育成していくことが当事業の目的のひとつである。





・また、これらの課題は震災によって顕在化したが、石巻地域だけでなく被災したほかの地域、ひいては全国で抱える課題と密接につながっているものである。被災した他地域などの参考とするべく、当団体の蓄積した移動支援のノウハウを「見える化」することには価値がある。

【直接的効果】

・当事業による移動困難者のための送迎によって、心身や経済等さまざまな困難要素を抱える交通弱者が外出する手段を得ることができた。

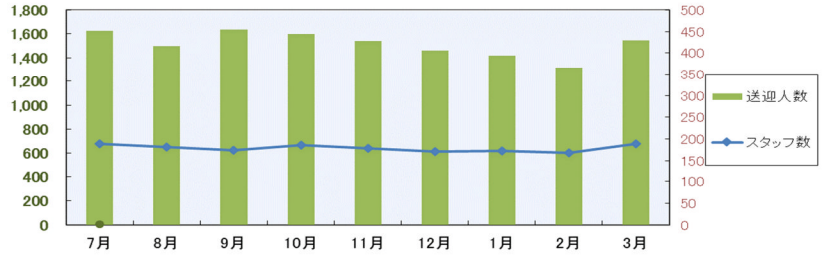
・移動手段を持たなかった住民の外出の機会を増やし、住民の孤独感を解消・軽減させることができた。また要援護者の見守りの役割を果たし、救急搬送へつないだり生命に関わるような送迎を行ったりと、生きることそのものを支えることができた。

・経済的に困窮している住民が、通院等のための高額な交通費に生活を圧迫されることがなくなり、心豊かな暮らしを送ることができた。

・送迎実績：送迎人数のべ 13,637 名、月平均 1,515 名の送迎を行った。大きなばらつきなく、安定的な送迎を実施し、利用者に安心した外出手段を提供することができた。

7 月～3 月の送迎実績

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均	日平均
送迎人数	1,627	1,496	1,634	1,600	1,539	1,459	1,417	1,317	1,548	13,637	1,515	67
送迎回数	1,373	1,262	1,367	1,314	1,279	1,187	1,154	1,102	1,303	11,341	1,260	55
スタッフ数	188	181	174	185	178	171	172	168	188	1,605	178	7.8



・中心となる地元スタッフは同じ顔ぶれで安定していたため、利用者も安心して送迎を利用し、日々の見守りにつなげることができた。

・心身に困難を抱えながらも在宅での自立した生活を維持したい住民が、移動手段を得ることによって、あきらめることなく暮らしを維持することに貢献した。

・付き添いつきのお出かけ送迎を月 1～2 回継続して開催した。利用者が回を追うごとに参加を心待ちにし、買い物などの個人の目的だけでなく、「人に会う」「外へ出る」ことそのものを楽しむようになっていった。

・付き添いつきお出かけ送迎の新規ボランティア参加者が多く集まり、活動を支えた。「通常の送迎のボランティアは難しいが、日曜に一日だけの付き添いならできる」という、これまでと異なる参加者（支援者）の層が広がった。

付き添いお出かけ送迎参加者

	7月	8月	9月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
内容	体操整体	買い物	歌っこ	墓参り	買い物	温泉	買い物	カラオケ	買い物	墓参り	合計
参加利用者	**16**	**10**	**22**	**12**	**8**	**19**	**18**	**22**	**15**	**19**	**161**
ボラ・スタッフ	16	6	22	10	12	13	9	16	10	13	127

・利用者向けの通信発行により、個別の関係でしかなかった利用者との関わりを広げ、まちや組織、他の利用者とのつながりを感じられる機会とした。発行回数が少なかったことは今後の改善点である。

・勉強会や情報交換会等を活用して他団体との関わりを積極的に持ち、連携体制を構築し、課題を抱える住民が適切な支援や制度を活用することができるための土台作りを行った。

・送迎講習会を 3 回開催した。いずれも定員一杯で満足度の非常に高い講習会とすることができた。講習会によって地域住民の送迎と介助の技術を高め、地域の移動についての学びの場を持ち、安全な送迎の「担い手」を生み出すことへつながった。

・講習受講者:第一回 23 名　第二回 22 名　第三回 21 名　合計 66 名が参加。

・NPO 向けの送迎実習受け入れの形を整えることにより、それぞれの NPO の利用者をみずから送迎し、移動困難者を多くの担い手が支える地域にするための活動を行った。

・毎月スタッフ全員参加の研修を行い、組織全体の課題をスタッフそれぞれが「自分ごと」として捉え、また安全な送迎に必要な技術を身につけ質の高い送迎への努力を続けた。自主性が高まり、事業と組織の継続性が高まることにつながった。

・地域住民組織を対象とした住民主体の移動支援活動を冊子化し、移動の課題解決のための取り組みを模索している他の人々へ参考事例を示し、新たな支援活動の後押しを行った。

【波及的効果】

・地域の高齢者や障害者、課題を抱える住民の外出と交流の機会が増えることによって、その地域全体が活性化し、経済の循環や消費活動が活発になった。

・困難を抱える住民の心身の健康が増進され、医療費の低減や介護予防、介護度の上昇抑制等にも効果があった。

・運転に不安を抱える高齢者等が免許返納後の暮らしに希望を持つことができ、安心して地域でいつまでも暮らしていくことができる要因となった。

	・移動の心配への対策をとることにより、不便さ・外出への不安を一因として都会に流出した人々が安心して戻ってくることのできる地域づくりに貢献した。 ・団体向け送迎実習プログラムを作成し提供することで、提供先の実習受講者だけでなく、自団体のスタッフの知識や技術、意識が向上し、より質の高い移動支援活動ができるようになった。 ・災害移動支援活動を冊子化するために活動を整理することは、自らの活動をあらためて学びなおし、仕組みの最適化を進め、組織力を強める機会となった。
平成 30 年度以降の活動計画	・「震災から 10 年」という時間的な区切りが近づいていることを踏まえ、“区切り”を越えた先にある持続的な組織のあり方や運営の形などを話し合いながら体制づくりを進める。 ・透析送迎に重点を置いた福祉有償運送開始に向けた協議を、専門家を交え進める。 ・「丈夫な事務局づくり」をテーマに、活動を土台から支える事務局体制を整え、安定した組織づくりを行う。 ・ミニ生活支援の本格的な開始など、現場のニーズに寄り添った活動を見極めながら新たな活動を実施する。 ・高齢者の徘徊見守り SOS ネットワークへの登録を進め、地域の見守りの役割を同時ににになう送迎活動を行う。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は４団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－４
事業名	育児中の母親と地域社会の絆をつなぐインターンシップ事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク 【参画した団体（ＮＰＯ等)】ベビースマイル石巻、パソコンママネット、いしのまきＮＰＯセンター、スイッチ（インターンシップ受入先） 【参画した団体（ＮＰＯ等以外)】アイローカル、よつばファーム（インターンシップ受入先）
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	（7、8 月） ・「女性の就労を応援します！やっぺす！スクールこっとん」企画および受講生の募集 （9 月） ・「女性の就労を応援します！やっぺす！スクールこっとん」開講式およびオリエンテーション実施（参加者数：14 名） ・履歴書、職務経歴書の書き方講座実施（参加者数：8 名） ・ビジネスマナー講座①実施（参加者数：12 名） （10 月） ・ビジネスマナー講座②実施（参加者数：11 名） ・面接講座①実施（参加者数：12 名） ・パソコン講座①（参加者数：10 名） ・パソコン講座②（参加者数：9 名） （11 月） ・パソコン講座③（参加者数：11 名） ・パソコン講座④（参加者数：10 名） ・面接講座②（参加者数：9 名） ・パソコン講座⑤（参加者数：10 名） ・インターンシップ説明会（参加者数：11 名） （12-2 月） ・インターンシップ実施 （2 月） ・パソコン補講講座①（参加者数：6 名） ・パソコン補講講座②（参加者数：7 名）

	・パソコン補講講座③（参加者数：8 名） ・報告会/修了式（参加者数：14 名） （3 月） ・報告書完成
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 4,408,963 円 （国費 2,939,308 円、県費 1,013,692 円、実施主体 455,963 円） 【内訳】 人件費 2,892,727 円、諸謝金 437,600 円、旅費 11,615 円、消耗品費 71,466 円、印刷製本費 598,335 円、通信運搬費 66,840 円、使用料及び会場賃料 98,780 円、募集広告費 21,600 円、委託費 210,000 円
具体の成果	【事業目的】 地域の子育てのしやすさや働きやすさ、生活しやすさを向上させる。 【当事業で取り組んできた課題】 ・新しく引っ越した地域に馴染めない。地域社会との接点が少なく、相談できる人がいない、育児中の母親の孤立解消。 ・育児の数年間、仕事から離れた母親は、仕事の再開についての不安解消 ・希望する女性が、育児や家事をしながら働ける環境づくり。 【背景】 ・震災後の被災地沿岸部では、高齢化と同時に若者の人口流出が加速している。子育てのしやすさや働きやすさ、生活しやすさを求めて、若い世帯は都市部へ移住しており、それに歯止めをかけるには、現在の復興まちづくりにおいて、ハード面での整備とともに、子育てのしやすさや働きやすさ、生活しやすさを向上さえるソフト面での課題がある。 ・育児が落ち着けば仕事を再開したい母親は多いが、育児の数年間、仕事から離れた母親は、仕事の再開について多くの不安を抱えている。 ・石巻の女性の地域社会での活躍を促進するためには、希望する女性が、育児や家事をしながら働ける環境づくりが必要である。 【直接的効果】 ・受講生：目標 12 名に対して 12 名が受講し、11 名が修了。 ・インターンシップで受講生を受入する NPO や社会的企業：目標 7 団体に対して 7 団体

	・インターンシップ活動報告会への参加者：目標約 20 名に対して 14 名 ・インターンシップ先への就業：目標 5 名に対して 2 名 ・事業報告書の作成：目標 500 冊に対して 1000 冊 諸々のビジネススキルについての講座を受講することで、母親たちが育児中にスキルアップを図ることができた。また、子育てで仕事のブランク期間があるため、子どもが大きくなった後に再度働くことに不安を感じていたが、その不安が軽減されたという受講生からの感想も得ている。 また、子育て中の母親たちが、同様の環境にある母親とともに学ぶことで、悩みを気軽に相談したり、励まし合ったりする仲間ができたことも大きな成果のひとつである。今回、インターンシップから就職にいたったケースは 2 件あり、人手不足の解消につなげることができた。 【波及的効果】 地元の NPO でインターンシップをし、地域の課題とそれに向き合う活動に直接触れることができた経験から、社会貢献の意欲が高まり、NPO への就職を希望する受講生が居た。その女性はこの 4 月から NPO へ就職することができた（1 名）。 女性の力が十分に発揮される地域づくりに至ることは、一朝一夕にはいかないが、今回のスクールでは、講師陣もほとんどが地域の女性が担当しており、受講生たちが、先輩女性の活躍を目の当たりにすることで、地域で活躍する女性のロールモデルとして、具体的なイメージを持つことができたと考えている。受講生たちには、近い将来、女性が活躍する地域づくりの一翼を担って欲しいと切に願っている。 今回のインターンシップの経験から、組織の人材マネジメントを見直すことに繋がった団体もあった。中には、平常時からインターンシップ制度の導入を検討している団体もある。
平成 30 年度以降の活動計画	復職への不安低減には、中間的就労が有効であることがわかった。しかし、地域の子育て中の女性には、家族の理解不足や雇用のミスマッチなど、他にも様々なハードルがある。今後は、インターンシップなどの就労体験の機会と研修開催に加え、女性たちの希望に寄り添いながら、相談業務やセミナー、就職説明会等と合わせて、支援を継続していく。

評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が８割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興･被災者支援の実施に関わった団体数は４団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－５
事業名	『いしのまき高校生『絆力』向上プロジェクト』
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人　Switch 【参画した団体（ＮＰＯ等)】特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク（ボランティア協力先)、一般社団法人震災こころのケア・ネットワークみやぎ　からころステーション（ケース共有機関)、公益財団法人共生地域創造財団（企業見学・体験実習協力） 【参画した団体（ＮＰＯ等以外)】宮城県教育委員会（シンポジウム後援）、ハローワーク石巻　学卒部門（利用者の就職相談対応)、宮城県石巻北高等学校飯野川校、宮城県立東松島高等学校（NOTEcafé 実施校)、パーソルテンプスタッフ株式会社、石巻サポートセンター、石巻地域若者サポートステーション(NOTEcafé 設置の際にアドバイス・協力を頂く)、日本カーシェアリング協会（レンタカー貸出)、イオンペット株式会社 PeTeMo 石巻店、だるまチップ工業株式会社、有限会社氏家農場、株式会社ライフケアプロジェクト花鳥風月、
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	石巻市、東松島市、女川町など、石巻圏域の被災地域の高等学校の生徒の心のケアと中退予防、そして地域人材の育成を目的とし、モデル校 2 校での就学・就労サポートと、石巻市中心部に高校生が日常的な相談や進路の相談ができる窓口を設置。高校生、地域企業、一般市民の有機的な接続を促すことで、これからの石巻を面で支える仕組みの構築を目指す。 <3 つのコンポーネント> ①「モデル校 2 校における就学・就労サポート体制の構築」 石巻圏域の高等学校 2 校を設定し、学校内にて定期的に、気軽に就学・就労相談が出来る窓口を設置。震災後の不安定な心理状態の高校生の就学・就労をサポートする。 ②「石巻圏域での高校生の相談窓口の設置と訪問相談体制の構築」 石巻市駅前にて、高校生の学外相談窓口を設置。学校で相談できない不安や悩みを継続的に相談できる場として機能する。また、学校の関係者が在学中から早期に地域の外部機関へつながりを持たせたい生徒を紹介できる窓

	口とする。 ②「高校生『絆力』シンポジウムの開催による被災地域の担い手育成」 　地域企業や地域資源と連携し、若者をサポートしている事例を紹介しながら、石巻というエリアで『絆力』を活かしたかたちでの持続的な地域の担い手育成体制の構築を目的とする。 【スケジュール】 6 月：プログラムオフィサー配置、事業開始準備 　　NOTEcafé 事業スタート（～3 月末日まで） 7 月：「いしのまき『まなび』応援窓口」事業スタート（～3 月末日まで） 8 月：　　↓ 9 月：　　↓ 10 月：　　↓ 11 月：　　↓ 12 月：　　↓ 1 月：いしのまき高校生『絆力』向上シンポジウム　開催（参加者：25 名） 2 月： 3 月：平成 29 年度事業終了、30 年度事業計画立案
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 3,928,236 円 （国費 2,618,824 円、県費 916,176 円、実施主体 393,236 円） 【内訳】 人件費 2,769,444 円、諸謝金 70,648 円、旅費 347,281 円、消耗品費 26,855 円、印刷製本費 87,850 円、通信運搬費 155,770 円、使用料及び会場借料, 470,388 円
具体の成果	【課題・事業の必要性】 ・震災後の石巻圏域からの若年人口の流出加速 ・石巻圏域の有効求人倍率の高止まり、地域若年者の石巻圏域での定着 ・「まなぶ」に課題を抱えた高校生の増加 　県内の高校退学者数は年間 1136 人。中退学率は 1.8%と、全国 5 位の中退率であり、東北六県の中でも突出している。 ⇒石巻圏域で次の時代の担い手となる高校生の就学、就労に対するサポートは急務 　全国的に自殺者数は年々減少を続けているが、一方で小中高生の自殺者数は 300 名を超え、未成年の自殺者数が微増傾向にある。若年層の自殺者数が

	微増しているという傾向は社会構造的な課題を浮き彫りにしており、特に被災沿岸部で不安定な心理状態に置かれている若年者への心のケアは大きな課題である。 　これまで石巻圏域にて、課題を抱えた若者の「まなぶ」「はたらく」のサポートに取り組んできたが、その事業を活かすとともに、昨年度事業で展開した「石巻はたらくサポーター養成講座」の卒業生に活躍いただくことで、地域若者、企業、そして世代間の有機的な接合を目指して本企画を設定した。 【事業成果】 ①「モデル校 2 校における就学・就労サポート体制の構築」（H29.6 月～） 　宮城県石巻北高等学校飯野川校、宮城県立東松島高等学校の 2 校にて NOTEcafé 実施 開催回数：66 回　　利用生徒数：19 名　　相談件数：182 件 内容：学校内での就学・就労相談窓口 　　ソーシャルスキルトレーニング講座（集団型 1 クール、個別型実施） 　　VRT（職業レディネス・テスト）によるキャリアガイダンスの展開 　　地域の企業見学・体験学習のサポート ＜アウトプット＞ 　進路行事（高校受験期間）による入室禁止期間があったが、各校週 1 で計画通り訪問・実施できていたため、2 校合わせ 66 回/目標 70 回は概ね達成と考える。利用生徒数は 19 名、相談総件数は 182 件と当初目標に設定していた数値には至らなかったが、より一人ひとりの個別対応に特化するかたちの体制をとることができ、時間の確保を要する VRT 検査などの職業ツールを活用・提供することができた。 ＜アウトカム＞ 　学内だけでなく、地域企業見学・体験実習にも繋げられたことで、家族・学校以外の地域の方々と関わる機会を創出できた。実際の見学・体験を通して、分野への興味関心が広がり、今後の進路検討に向けての材料の一つとして収穫があった。また、地域の企業としても活動を通して、高校生たちの不器用ながらも一生懸命な姿に“今どきの高校生”に対して抱いていた印象がまた変わったとの声も寄せられている。 ②「石巻圏域での高校生の相談窓口の設置と訪問相談体制の構築」（H29.7 月～） 　石巻駅前にあるユースサポートカレッジ石巻 NOTE 内にて高校生の学外相談窓口設置

	利用者総数：30 名　　相談件数：144 件 内容：高校生の就学・就労、その他相談対応 　　個別型ソーシャルスキルトレーニング、トリセツ作成（自己分析） 　　地域イベントボランティア、地域企業への見学・インターンシップ実施 ＜アウトプット＞ 　設定していた相談件数 120 件を超えるかたちで、就学・就労相談に限らず、高校修学や日常生活、人間関係などの悩み・不安など、幅広い相談内容が集まり、本人が家庭や学内で相談できないことを吐露できる場所として機能した。一人ひとりの希望や目標に合わせた講座やプログラム、外部活動を取り入れたことで、本人の社会経験や自信に繋がる活動を提案・実施することができた。 ＜アウトカム＞ 　高校生が抱える悩みは多岐にわたり、学校の枠組みだけでは解決が難しいことが多い。生活困窮等の課題をはじめ、発達障がいの傾向がある生徒・グレーゾーンの生徒など、学校関係者が在学中から早期に地域の外部機関につながりを持たせたい生徒へのアプローチの一つとして窓口を活用。多角的な支援体制を取ることで、本質的な課題解決や卒業後の早期進路検討に繋がる。本人にとっても、家庭・学校以外の相談先・サードプレイスとして気軽に利用できる存在として、今後も地域資源の一つとして継続的な活用も可能となる。 ③「高校生『絆力』シンポジウムの開催による被災地域の担い手育成」 いしのまき高校生『絆力』向上プロジェクトシンポジウム　開催 テーマ：～これからの協働連携を考える～ 内容：高校生・地域企業との有機的な接続を即すことで、これからの石巻を面で支える仕組みの構築を図るため、神奈川県にて先駆的活動をしている支援団体、石巻市で進路指導をしている教諭に活動を講演頂き、現状の共有から今後のヒントについて話し合った。 ・「高校に入る支援～様々な連携の形を作り 若者を支える（神奈川県の事例より）～」K2 インターナショナルグループ　岩本　真実氏 「地域の支援団体と連携した進路支援の取り組み」 宮城県石巻北高等学校飯野川校　進路指導部長　大橋　孝幸先生 ・グループトーク　「協働で地域が輝く」 開催日時：平成 30 年 1 月 18 日（木）

	場所：東松島市コミュニティセンター　研修室 参加者：25 名/目標動員 120 名 （内訳：行政関係者：6 名、学校等教育関係者：5 名、医療・福祉関係者：1 名、地域の若者支援機関・不登校引きこもり支援機関：11 名、その他（新聞社等）：2 名） ＜アウトプット＞ 地域企業からの参加者が 0、また目標としていた動員数には至らなかったものの、平日開催にも関わらず普段顔を合わせることのない仙台方面・大崎方面からの参加者や学校職員の参加が一定数あった。そのため今回のターゲット層への周知は概ね達成かと考える。一人ひとりが発言できる機会が多く作れたため、講師含め互いの考えを素直に話し合える場となり、互いに出来る持ち味を知り、新たなつながりや広がりにつながった。 ＜アウトカム＞ 今回関東圏域にて先駆的に取り組んでいる団体の事例、より身近な地域で既に工夫を取り入れ始めた学校事例の 2 つに様々な地域で活躍している参加者が触れることで、より若者支援体制を地域全体で見つめ直す契機とすることができ、自身の現在の立ち位置から捉え、主体的に考える機会となった。今回のシンポジウムで話したこと等を参加者がそれぞれの機関・サポーター、企業へと情報を伝達していくことで、より地域へと理解が繋がっていくのではないかと考える。
平成 30 年度以降の活動計画	今回の事業を導入として、更なる発展性を持ちながら継続的に関わる。ユースサポートカレッジ石巻 NOTE を地域内で持続展開することで、地域の高校生に対するサポート体制を展開。地域企業との接点を創出することで、持続的な復興人材の創出に取り組む。 ・NOTEcafé：継続のオファーあり。その他地域の学校への展開を提案していく ・企業見学・体験実習などの社会的経験の機会増加、地域企業開拓へ動く ・今年度の事業で関わった機関や団体と協力しつつ、実際のサポート成功事例を地域に継続発信し、地域の担い手育成体制の構築をねらう
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった

	（上記評価の理由） 　NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合は約６割であった。 　また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興･被災者支援の実施に関わった NPO 等は３団体であるが、NPO 等以外から多くの団体の参画があり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－６
事業名	亘理山元地域コミュニティ復興事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人亘理いちごっこ 【参画した団体（ＮＰＯ等）】特定非営利活動法人子育て支援アシスト・エフワン、スタンドアップ亘理、NPO 法人 FM あおぞら、NPO 法人さをり広場、亘理町内地区(南北城東区、南町北区、浜吉田北区)、CTVC 東京ボランティアセンター、支援をご縁に協力隊、藤女子大学、宇都宮海星女子学院中学高等学校、浦和明の星女子中学高等学校、聖心女子大学、目黒星美学園中学高等学校 【参画した団体（ＮＰＯ等以外）】やまもと子どもも大人もみんなで遊び隊、有志団体 Rainbow、宇都宮カトリック女性部、東北医科薬科大学福室アンサンブル、Wood Craft 道楽倶楽部、Well、宇都宮大学
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【事業内容】 　地域の交流の中、被災者の抱える課題を引き出すサロン活動を行った。サロン活動から住民主体のサークル活動への動きのある活動もあり、今後も継続して取り組んでいくことが出来るようにサポートしていく。また地域復興を担う団体と連携し、お互いのノウハウの移転を行うとともに、より細やかなニーズの吸い上げ及び対応を可能とさせていった。 【スケジュール】 ７月 （11 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：7 名） （13 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：10 名） （14 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：17 名） （17 日）宇都宮海星学園中学高等学校被災地研修受入及びサロン活動（参加者数：27 名） （19 日）手づくりなんでもサークル（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：10 名） （20 日）事業委託団体とのミーティング （20 日）亘理高校インターンシップ打合せ （23 日）絵付け体験(「ポニーキャンプ in 亘理」内)（参加者数：17 名） （24 日）「通い de スタプレ合宿」区長打合せ （24 日）亘理高校インターンシップ（～26 日）

	（25 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：8 名） （25 日）亘理町役場交付決定報告 （25 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：24 名） （26 日）山元町企画財政課、山元商工会本事業交付決定報告 （31 日）亘理高校インターンシップ受入（～8 月 2 日） ８月 （2 日）藍の生葉染め教室（参加者数：7 名） （7 日）亘理高校インターンシップ受入（～9 日） （7 日）浦和明の星高等学校被災地研修（～9 日、参加者数：10 名） （19 日）和・木工教室（参加者数：32 名） （21 日）聖心女子大学被災地研修及びボランティア受入（通い de スタプレ合宿）（～24 日、参加者数：9 名） （23 日）宇都宮大学被災地研修受入、（～25 日、参加者数：21 名） （24 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：11 名） （28 日）お茶のみヨガサロン（浅生原集会所、参加者数：6 名） （29 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、参加者数：21 名） （29 日）おらほの食卓（参加者数：28 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、のべ 97 名） ９月 （5 日）楽らく茶のみ（参加者数：12 名） （6 日）手づくりなんでもサークル（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：8 名） （8 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：17 名） （12 日）楽らく茶のみ（参加者数：8 名） （14 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：8 名） （20 日）手づくりなんでもサークル（参加者数：8 名） （25 日）お茶のみヨガサロン（浅生原集会所、参加者数：10 名） （26 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：10 名） （26 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、参加者数：26 名） （26 日）おらほの食卓（参加者数：27 名） （28 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：16 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、のべ 181 名） １０月 （3 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：4 名）

	（12 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：11 名） （13 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：14 名） （17 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：17 名） （17 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、参加者数：13 名） （22 日）和やか交流コンサート（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：45 名） （26 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：15 名） （26 日）上浜街道復興住宅を主とする住民イベントサポート協力 （31 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：19 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 166 名） １１月 （7 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：5 名） （9 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：9 名） （10 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：14 名） （21 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：7 名） （22 日）そば打ちサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：6 名） （23 日）亘理 DAY CAMP（吉田公民館、参加者数：77 名） （27 日）お茶のみヨガサロン（浅生原集会所、参加者数：6 名） （28 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、参加者数：12 名） （28 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：27 名） （29 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：13 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 139 名） １２月 （5 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：4 名） （8 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：18 名） （14 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：9 名） （19 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：6 名） （21 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：12 名） （25 日）お茶のみヨガサロン（浅生原集会所、参加者数：6 名） （25 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：49 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 104 名） １月 （9 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：9 名）

	（11 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：9 名） （12 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：13 名） （22 日）お茶のみヨガサロン（浅生原集会所、参加者数：8 名） （23 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、予定） （23 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：4 名） （25 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：15 名） （30 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：13 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 101 名） ２月 （2 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：8 名） （6 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：5 名） （8 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：9 名） （20 日）亘理まま・ぱぱサロン（委託事業、参加者数：名） （23 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：4 名） （22 日）お茶のみヨガサロン（浜吉田北公会堂、参加者数：16 名） （27 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：21 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 220 名） ３月 （6 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：6 名） （8 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：7 名） （9 日）楽らく茶のみ（箱根田東集会所、参加者数：9 名） （20 日）楽らく茶のみ（大谷地復興住宅集会所、参加者数：6 名） （21 日）わたりホームカミングデー（吉田地区交流センター、参加者数：100 名） （22 日）お茶のみヨガサロン（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：11 名） （26 日）お茶のみヨガサロン（浅生原復興住宅集会所、参加者数：8 名） （27 日）おらほの食卓（上浜街道復興住宅集会所、参加者数：17 名） （毎週月～水）山元町子どもや大人の居場所づくり事業（委託事業、山下幸街堂、参加者数：のべ 143 名）
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費： 7,111,709 円 （国費 4,741,139 円、県費 1,658,861 円、実施主体 711,709 円）

	【内訳】 人件費 3,073,338 円、諸謝金 470,080 円、旅費 217,037 円、消耗品費 459,293 円、印刷製本費 96,139 円、通信運搬費 34,560 円、使用料及び会場賃料 111,200 円、委託費 2,650,062 円
具体の成果	＜直接的効果＞ ○ 月 8～10 回程度定期的にサロン活動を開催した。＜楽らく茶のみ＞は有償ボランティア主体の活動となり、各会場により特色あるサロン活動となった。当法人のボランティアスタッフは、復興住宅や集団移転地域に住む方が多く、当法人でのボランティアの経験を地区コミュニティの構築へ生かすことができた。次年度からは自主運営へ移行できる方法をボランティアスタッフと練りつつ、参加者の移行を取りまとめていくところまで進めていった。＜お茶のみヨガサロン＞は月 2～3 回の通年の活動を通して、何人かの取りまとめ役を立てることが出来た。会場確保、会費の徴収、呼びかけなどについて彼女たちとアイディアを出し合い話し合いを進めていった。次年度より＜浜吉田北ヨガサークル＞として住民主体のサークル活動となった。月 1 回の定期開催として集まった会員で会費を出し合い、現在 20 名程度のサークルとなっている。会場までの乗り合いなどによる声の掛け合いも生まれ、参加する仕組みができつつある。今後も継続して活動していけるよう、当方では金銭面の一部補助や広報等でのサポートを行っていく。 ○ 月に 1 回開催した＜おらほの食卓＞では、安心安全で健康的な食の提供を行いながら、お年寄りだけではなく、親子での参加も見られ、家族のようなコミュニティが生まれた。「月に 1 回みんなと顔を合わせて食事をするのが楽しみ」という声や「バランスのよい食事がとれた」という声も上がった。次年度以降の継続については現在のところ未定ではあるが、地域住民から継続の声や地域包括支援センターとの協議の中で、「当方のような第 3 者による食事会などは継続してほしい」という要望も上がっている。学生ボランティア、地域ボランティアを養成することなどによって、継続可能な食事会などを開催できる仕組み作りに取り組んでいく。 ○ 震災以前の地区老人会で集まりたいが、会費の中ではなかなか賄えず、お役を担う一部の人たちに負担がかかっていた。荒浜地区(2 か所)、長瀞浜地区などから、「今後も老人会等の集まりを存続したいが自分たちも高齢となり支えていくことが困難になってきた。どうしていったらいいだろうか。」という相談が寄せられるようになってきている。そのような声にこたえ、おらほの食卓などにおいて人が集まる場での健康に留意した

	食の提供を心掛けてきた。　地区取りまとめ役を担っている人たちをサポートすることで、そこでのコミュニティの存続を図ることが出来た。また、今年度にて宮城県肢体不自由児者協会が亘理分室を撤退。今後の運営に関してのサポートをしていくことができないか検討が続いている。 ○ 福島から移住している世帯が多く住んでいる地区にチラシを配りながらお話を聞かせていただく活動を、ボランティアスタッフを中心に実施。＜亘理 Home Coming Day＞ や＜わたりデイキャンプ＞を中心に各種イベント、サロン活動に参加してもらった。 ○ 震災から７年が経過し、当時 10 代後半だった若い世代が親となり、子育てに対する不安のある方や当時の様子がフラッシュバックする方などのケアを＜まま・ぱぱサロン＞にて行った。親子で参加できるサロンを通してリラックスした後、不安や悩みなどを解消する場となった。また、最後の回では“孫を育てる”要素も加わった。社会環境が様々に変容する中、祖父母世代も一緒に子育てについて学ぶ機会はなかなかなかった。震災後核家族化が進んでいるが、このようなサロンを通して親世代祖父母世代の相互理解につながっていくことを期待する。 ○ 山元町では週 3 回会場を解放し、誰でも気軽に立ち寄れる場をスタンドアップ亘理に委託し開催した。月間でのべ 100 名以上の利用者がおり、サロンや勉強会など利用者のニーズに合わせた活動を行った。 ＜波及的効果＞ ○ 今回委託した団体であるスタンドアップ亘理との連携において、地域に根差した団体に業務委託することで地域のつながりを活かした呼びかけや催し物を開催することが出来た。住民たちからも活動を継続してほしい声や、独自の活動を構築していきたいという声が上がっている。スタンドアップ亘理が地域住民に伴走する主体的活動へと検討が続いている。アシスト・エフワンとの連携においては子育て支援を専門に行っている団体との連携の中で、当方だけではケアできない範囲の方々まで支援することができた。前述のように、子育て中の親及び祖父母との相互理解へつながっている。次年度当方では家庭的保育事業をスタートさせる。当事業で開催した＜まま・ぱぱサロン＞に参加された保護者の方の一部も保育事業スタッフとして活躍が始まる。当方の NPO 活動を理解していただきながら、地域雇用のひとつにもなった。 ○ ボランティア主体となったサロン活動の実施が継続化してきている。被災地で自分たちも何かしたいという気持ちを繋ぐ役目を担わせていただくことが出来た。当事業においても被災地研修やイベント等にて県及び

	町内外の大学、高校、有志団体、個人などのボランティアに支えられながら運営を行った。 次年度も 4 つの高校大学、2 つの社会人有志が亘理山元にて活動を行いたいと申し出がある。当方だけでは担えない地域サポート、地域住民だけでは運営が煮詰まってしまっている活動などに大きな力を継続していただいている。このような活動を自分たちの学びにしていきたいと 2018 年 10 月には活動についての講演活動を東京で行うこととなった。また新たなつながりを作り、地域の元気へつなげていく所存である。
平成 30 年度以降の活動計画	○地区民生委員や地域住民、地域外学生等とコラボした地域交流を図る事業の組み立てを行っていく。 ○地域活動団体との連携を強化し、長期的な活動を行なっていける非営利活動を行っていく。 ○こどもからお年寄りまで誰もが集うことが出来る環境を地域の中に作っていく。 ○大学との連携を図り、学生による被災地における栄養バランスを考えた献立作成等を行っていく。　サロンを行う中、質のいい食事を摂りながら交流することは重要なことである。健康に留意しながら笑顔で集まることが出来るサロン活動を今後とも目指していく。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が８割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は１４団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（１）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－７
事業名	仮設住宅コミュニティ維持／復興公営住宅コミュニティ形成と共助的見守り推進事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】 取組実施主体『一般社団法人 石巻じちれん(旧 石巻仮設住宅自治連合推進会事務局)』 実施主体は、石巻地域に散在する仮設団地自治組織(自治会・世話人会)を会員とする「石巻仮設住宅自治連合推進会」の事務局が法人格を取得した団体である。 石巻仮設住宅自治連合推進会は、石巻地域の全仮設世帯の半数以上の入居世帯（3,151 世帯、全仮設戸数：5,909 世帯の 53.3%）を占めており、その意味で被災者の声を代表する地縁団体である。一方、旧石巻仮設住宅自治連合推進会事務局は会員仮設団地自治会役員の要望事項を受け、相談スタッフの派遣、各種会合の設定・実施、外部アクターと仮設団地自治会との窓口調整など日常的な実働を担っており、その意味で支援団体的な活動を行ってきた。今般、仮設住宅を対象とした活動の長期化と復興公営住宅を対象とした各種支援活動の増加を受け、持続的・安定的な活動を企図して事務局が法人化したが、一般社団法人石巻じちれんと石巻仮設住宅自治連合推進会はこれまで通り一体の活動を継続するものである。 【参画した団体（ＮＰＯ等)】石巻専修大学ボランティア、東北大学ボランティア(たなぼた)(仮設住宅コミュニティ維持事業:つながりお茶会に参加、サポート。傾聴やお茶会内での催しを企画)、石巻市社会福祉協議会蛇田地域包括ケアセンター、NPO 法人からころステーション・NPO 法人 Switch、劇団ファトブルーム、(復興公営住宅コミュニティ形成と共助的見守り推進事業：ミーティングの参加、相談、活動の援助、情報共有、専門家の紹介、セミナー講師紹介やセミナー開催) 【参画した団体（ＮＰＯ等以外)】スターバックスコーヒージャパン株式会社（仮設住宅コミュニティ維持事業：お茶会参加(9 月より月１回ペース)）石巻市健康保険課/福祉総務課、石巻自動車学校（復興公営住宅コミュニティ形成と共助的見守り推進事業：相談、活動の援助、車両提供）
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日

事業内容とスケジュール	１仮設住宅団地における『つながりお茶っこ会』推進事業 ＜目的＞ 　石巻市内仮設住宅団地住民を対象とした『つながりお茶っこ会（茶話会）』を定期開催することにより、仮設住宅団地コミュニティを維持し、住民の孤立を防止することを目的とする。 ＜対象地域＞ 　石巻市内の集約先となる２２団地のうち、相対的に住民コミュニティの密な半島部に所在する５つの団地を除く、１６の団地（渡波第１団地、万石浦団地、大橋団地、蛇田西部第 1 団地、蛇田西部第 2 団地、追波川多目的団地、飯野川校団地、南境第 7 団地、南境第 4 団地、桃生中津山団地、開成第 10 団地、開成第 13 団地、向陽団地、河北三反走り団地・河北第 2 団地合同、旭化成団地、相川運動公園団） ＜実施手法＞ 　その日時に集会所に行けば「誰かに出会える・誰かにつながれる」という意識を持ってもらうことを最優先に、各団地住民の希望等を調整したうえで、開催の曜日と時間を特定して実施するとともに、定期参加者の状況把握につながりうるように（いつも来ている人の顔が見えないといた住民の変調に容易に気がつくよう）週１回の定期開催とする。なお、運営については、原則当会のスタッフ１～２名とボランティアにより実施し、すでに自治会といった住民組織の失われた仮設団地の住民負担を避けつつ、住民動向の把握に努める。また、ボランティアについては当会のこれまでのネットワークを生かし、すでに復興公営住宅に転居した仮設団地自治会役員ＯＢや現在も石巻市内で活動を続ける他支援団体から募ることで、仮設住民に復興公営住宅の状況を伝え転居に伴う不安解消につなげる一方、他支援団体と仮設住民の関係性維持と情報共有等を企図している。今年度においては、スターバックスコーヒージャパン株式会社や石巻専修大学、東北大学ボランティアサークル等の協力を受け、お茶会運営を行った。 ＜付記事項＞ 　本事業にかかわるボランティア・支援団体並びに行政等関係アクターとの情報共有と意見交換のための会議を定期的に実施する（助成事業年度内 4 回予定）。併せて本事業は震災による仮設住宅の終末期における状況並びにその対応策として、熊本地震における仮設住宅においても重要な知見と考えられるため、熊本地震による当該地域仮設自治会役員や支援団体との情報共有の機会を設けた。（熊本県社協コーディネートによる石巻視察会等） 上記をもとに、以下のとおりまとめた。

仮設集約拠点団地での「つながりお茶っこ会」

　仮設の集約拠点団地 16 ヶ所にて毎週一回実施した。仮設団地ごとに特性があり、住民がなかなか集まらない所や毎回 20 名近い人たちが集う団地もある。参加者は、その団地に現在住んでいる人たちだけではなく、既に復興住宅や自立再建で退去している人たち、すなわち仮設の OB たちが参加しているケースも多い。

〇つながりお茶っこ会開催

開催：6 か所×毎週 1 回開催　(2 時間程度)

内容：お茶など用意して歓談　カラオケにてコミュニケーション　相談

※外部ボランティア　月 1 回程度　(ものづくり交流・軽食づくり交流・演芸/音楽など)

参加者：仮設住宅住民と周辺地域、元の仮設住宅居住者

参加人数平均：全体平均　約 7 名　(1 団地約 20 世帯～50 世帯)

相談で多かったもの

・催しが減って寂しい・集約で入居した世帯との関係が薄い、無い

・復興公営住宅に入る権利がないが、年齢、体調面などで、収入が少なく、悩んでいる

・再建先での不安(主にコミュニティについて)

　要望で多かったもの

・集会所を開けていて欲しい　・お茶会を続けてほしい(自分たちだけで運営するのは、不安、年齢的にも難しい)　・再建先でも、相談に乗ってほしいなど

東北大学ボランティアサークル活動の様子
(足湯交流)

２. 復興公営住宅における住民サークル形成手法を活用した共助的見守り推進事業

	＜目的＞ 　高齢化率の高い復興公営住宅団地地域において住民サークル形成並びに運営支援を行い、地域コミュニティにおける高齢者等要援護者の見守り環境を形成することを目的とする。 ＜対象地域＞ 　石巻市新蛇田地区（のぞみ野・あゆみ野地区）における復興公営住宅を主たる対象地域とする。 ＜実施手法＞ 　実施手法は以下の 2 つを予定している。 (1)とりわけ多くの高齢者に関心の高い「認知症予防」並びに「介護予防」を学び、当会の推進する「つながりカード」の普及と要援護住民相互の見守りを推進することを目的とするサークルを形成・育成し、会員募集を通じてその普及を図るとともに、サークルの会員相互の見守りさらには近隣の高齢者等要援護者の見守りへと拡大し、地域コミュニティにおける高齢者等要援護者の見守り環境を形成する。なお、当該サークルについては、昨年度当助成により当会が育成し、のぞみ野地区住民を中心として形成された『つながりサポーター「パル」』をコアとし、その運営支援を通じて参加者の拡大を図るとともに、同様のサークルをあゆみ野地区ほかの復興公営住宅に形成していくことを計画している。 (2)のぞみ野・あゆみ野地区に住民主体による音楽・軽運動等各種活動目的を持ったサークルを形成し、当該サークルと上記(1)のサークルの交流活動を通じた高齢者等要援護者の見守り環境の形成を図る。なお、当該活動については、昨年度に形成し運営が本格化している新蛇田第一集会所（のぞみ野地区に所在する大規模集会所）運営委員会を通じた各種催事等を活用することを計画している。 ＜付記事項＞ 　本事業で形成・支援するサークル参加者からも仮設住宅における「つながりお茶っこ会」の運営ボランティアを募集する予定であり、特に上記(1)のサークルについては、その活動の一環として仮設における傾聴活動も行った。 〇のぞみ野　つながりパートナーパル（改名前つながりサポーターパル）活動サポート 概要/内容：定期ミーティング開催 月二回（第 1・第 3 木曜日）　9 時 30 分～11 時 30 分（終了後お茶会）

	新蛇田第一集会所/新立野第一集会所いずれか 内容 ・活動内容の企画/計画(交流事業/毎月のカフェ開催/つながりカード普及など) ・住民として気になること共有 ・社会福祉協議会や地域包括ケアセンター相談員と勉強会(ケーススタディ) ・その他、ケーススタディ(石巻じちれん相談係) 　サークルメンバー　13 名　(のぞみ野地区住民　50 代～80 代　内男性 3 名)※メンバーには、あとから民生委員になった方もいる。 〇パル井戸端(みまもりカフェ)開催 目的：高齢者介護カフェ(認知症カフェ)をモデルに、介護や社会保障、心の病、障害などに関する相談、悩みを語る場、学ぶ場として、お茶ともちよりの漬物などを囲んで、地区内の住民交流をしながら、みまもりについて考え、行動するために運営。 主催：つながりパートナーパル(サポート、補助、共催　石巻じちれん) 開催：毎月第四金曜日　10 時～12 時　新蛇田第一集会所会議室 1.2 (4 月から開催　年 12 回/補助期間内 9 回) 内容：前半　お茶会と井戸端相談会、後半　セミナー・専門家の相談会・健康体操・歌を歌うなど 参加者：10 名～30 名　(後期から 20 名～30 名) 協力:石巻市社会福祉協議会　蛇田地域包括ケアセンター　からころステーションなど 〇住民交流バスで遠足 目的：つながりパートナー同士の交流と研修、つながりパートナーについて知ってもらうため、地区住民に募集をする。交流と啓発活動の一環。 開催内容：年 2 回ほど(一回は、助成期間外に実施。5 月に塩釜・松島へ) 10 月 20 日(金)　交流バスツアー研修　9 時～17 時 9 時集合　10 時 30 分～12 時 30 分　大崎地域創造研究会にて 「ＮＰＯ活動を始めるということ・地域の取り組みについて」事務局長 ・東鳴子「玉造荘」にて、自費昼食と見学(県施設) ・他、交流として、中山平見学・道の駅見学 (大崎地域の取り組みとして、100 歳体操の実施方法について学ぶ) まとめ：他地域の福祉政策や地域の非営利団体の活動や活動の仕方を学び、

	メンバーのモチベーションの向上につながった。また、バスで遠足をきっかけに、みまもりについて理解を示したメンバー外の方々が、パル井戸端に参加するようになった。 〇他、セミナー参加等 9 月 5 日(火)　若年性認知症講演会参加　石巻市主催 12 時 30 分出発　13 時 30 分～16 時　16 時 30 分着 11 月 22 日　石巻市社会福祉協議会主催フォーラム　事務局出席 〇熊本県視察研修(取材) 目的：復興予算による補助金に頼らない持続可能なみまもり活動のヒントを、熊本地震被災地の活動から学び、取り入れる。 熊本と石巻では以下の点が共通している。 ・被災により地域コミュニティが分断された ・仮設住宅、復興公営住宅が新たに建設される地域である しかし、熊本では復興予算を用いず、地域みまもり体制が明確化しており、組織的に活動が行われている。 このことから、復興予算から通常予算、補助から自主財源での活動維持、地域支え合いセンターの取り組みと住民みまもり活動組織を学び、本事業に取り入れることとした。 1 月 31 日 午前　御船町社会福祉協議会(地域支え合いセンター) ・地域支え合いセンターの活動とみまもりの実践について取材 午後　益城町役場　未来トーク取材(若者のまちづくり参加組織) ・未来トークの始まりと目的、活動、若者の意見を聴く場の作り方、まちづくり参加の方法について取材(活動拠点も視察)　その後、益城町友救の会にて、仮設自治会長と懇談) 2 月 1 日 午前　西原村地域支え合いセンター ・西原村での地域支え合いセンターの実務と仮設住宅住民のニーズについて取材 午後　益城町テクノ仮設団地　キャンナス熊本 ・地域支え合いセンター委託団体としての活動について取材。その後、益城町テクノ仮設団地　自治会　会長取材 取材から、つながりパートナーパルの活動を継続的に行うためには、「活動

	するための組織づくり」「活動主体は、のぞみ野住民であること」「サポート役はある程度必要だが、社会福祉協議会のような既存団体の下部組織になること」「独立した活動をみえる範囲で行うために、高齢者人材を発掘し、仲間として活動すること」「活動の定例化、活動の絞り込み、活動を知ってもらう努力」が必要であることが共有された。つながりパートナーパルのミーティングにおいて、社協の福祉協力隊にメンバーがそれぞれ加盟し、同時に、地域みまもり活動を推進していく組織を形成、地元企業の活動協賛が得られるよう実績をつくりつつ、同じ地域同士で助け合うため、会費を募ることとした。 この結果、2 月からのつながりパートナーパルの月例ミーティング(2 回)に、社会福祉協議会のＣＳＣが参加。協議の結果、福祉協力隊登録に向けた動きを社協側に打診した。 住民同士の交流、コミュニケーションをより推進するべきと判断し、4 月に会費を募りバス交流会を実施。精神障害を持つ親子(60 代と娘 30 代)の新たな参加を含む、メンバー以外で 15 名が参加し、みまもりや相談、話す場の必要性を認識しつつ、福祉協力隊的な活動を自主的に行った。また、バスの提供が地域住民からあり、低価格な会費にて実現可能となった。 住民としてできることは何か。お金をかけないでできることは何か。その観点が大きく芽生え、パルとして市や包括ケアセンター主催の無料講座、100 歳体操講習(5 回シリーズ)、認知症サポーター講習を受講、認知症カフェに参加し、認知症サポーターの増員を図っている。 このような活動の活発化により、自然と会計や書記の役割分担がなされ始め、事務局に頼らない自主活動が始まった。 〇啓発事業　1 月～3 月 つながりパートナーパル　ご案内冊子　制作・作成 目的：のぞみの地区みまもり活動のサークル発足と活動内容を周知。みまもり活動について理解をえて、一緒に活動するきっかけ、また、悩みごと、相談ごとなどの連絡先をお知らせ、早期こまりごとの解決へとつなげるために制作 内容：つながりパートナーパルの一年間の活動を紹介。また、悩み、困りごとの相談窓口として事務局(石巻じちれん)連絡先を記載。 仕様：Ａ３判　二つ折り　フルカラー　紙厚　4/6 判　110k ベース　2000 部 配布：のぞみ野地区全世帯(1265 世帯)及び関係各所　(戸建てには配布済

	み） 活動内容： 「つながりサポーターパル活動　ミーティング」 ・7月6日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・今後の方針確認　集会所七夕会手伝い　社会福祉系支援団体への見学案身近で気になること ・7月20日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・俳諧訓練について確認　認知症の参考資料(報道)について話し合い　社協と情報共有 ・7月28日(金)「パル井戸端」場所　新蛇田第一集会所会議室　7月期内容 10時00分～石巻市高齢者俳諧捜索訓練参加者より報告と協議 10時30分～ お話　蛇田地域包括ケアセンターから、石巻社会福祉協議会地域福祉コーディネイター浜崎による「社会福祉の仕事とは」に変更 11時00分～ 音楽つながりサポーターパル　サポーターメンバー伴奏 「あの歌を唄おう」ピアノに合わせて歌いましょう。(歌詞カードあり) お茶セット　10名分程度　茶菓子類　　10名分程度　持寄りと前回メンバー徴収分より 参加者　サポーター延べ5名　他参加者3名　オブザーバー　石巻じちれん1名　社協　2名 「つながりサポーターパル活動　ミーティング」 ・8月3日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・若年性認知症講演会出席について　バス交流とカフェ井戸端の進め方など打合せ ・8月17日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・地区盆踊り大会について　気になる人の情報共有 8月25日(金)「パル井戸端」　場所　新蛇田第一集会所会議室　8月期内容 10時00分～　参加者による近況報告など(座談) 10時30分～　事例検証　ビデオ資料から、現在の認知症にいて理解を深める 12時00分～　お茶と持寄りの茶請けを囲んで、座談 お茶セット　10名分程度　茶菓子類　　10名分程度　持寄り

	参加者　サポーター7名　他参加者2名　オブザーバー　石巻じちれん　1名 「つながりサポーターパル活動　ミーティング」 9月7日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・若年性認知症講演会に出席しての感想とまとめ・・・サポーターからパートナーに名称変更に ・バス交流について　行先などの検討 9月21日(木)　新立野第一集会所　9月30分～11時30分 ・カフェ井戸端の進め方について　バス交流企画会議・・・10月20日/27日いずれか　鳴子方面 ※ 9月29日(金)「パル井戸端」　場所　新蛇田第一集会所会議室　9月期内容 10時00分～　参加者による近況報告など(座談) 11時00分～　音　楽　つながりサポーターパル　西村富子 「あの歌を唄おう」　ピアノに合わせて歌いましょう。(歌詞カードあり) 12時00分~　お茶と持寄りの茶請けを囲んで、座談 お茶セット　10名分程度　茶菓子類　　10名分程度　持寄りと前回メンバー徴収分より 参加者　サポーター7名　他参者20名　オブザーバー　石巻じちれん　1名 ※チラシを新蛇田地区全戸配布に切り替える 「つながりサポーターパル活動　ミーティング」 10月5日(木)　新立野第一集会所　9時30分～12時 ・バス交流企画について・・・鳴子決定、研修先に、大崎地域創造研究会に決める ・パル井戸端、役割分担 ・地域について情報共有 10月19日(木)　新立野第一集会所　9時30分～12時 ・バス交流企画　質問内容の確認、バス交流ツアー、最終募集人数確認 ・パル井戸端内容確認 ・地域の情報共有 10月20日(金)　交流バスツアー研修　9時～17時

	・9時集合　10時30分～12時30分　大崎地域創造研究会にて 「ＮＰＯ活動を始めるということ・地域の取り組みについて」事務局長児玉 ・東鳴子「玉造荘」にて、自費昼食と見学(県施設) ・他、交流として、中山平見学・道の駅見学 (大崎地域の取り組みとして、100歳体操の実施方法について学ぶ) 10月27日(金)「パル井戸端」　場所　新蛇田第一集会所会議室　10月期内容 10時00分～　参加者による近況報告など(座談) 11時00分～　情報共有と検討会 12時00分～お茶と持寄りの茶請けを囲んで、座談 お茶セット　10名分程度　茶菓子類　　10名分程度　持寄りと前回メンバー徴収分より 参加者　サポーター8名　他参者3名　オブザーバー　石巻じちれん　1名 ・つながりサポーターパル活動 「見学･研修」11月2日(木)　13時～16時　石巻　祥心会(障碍者施設)　担当鈴木 参加者　10名　社会福祉協議会　1名　石巻じちれん　1名 ・施設の成り立ち・施設案内・支援内容見学他 「つながりサポーター活動　ミーティング」 11月16日　新立野第一集会所　9時30分～12時 ・石巻市介護福祉課より「百歳体操プレ講習説明」 ・石巻市地域協働課より　あいさつ(偶然居合わせ・地域情報共有) ・社会福祉協議会　浜崎　他体操について説明など ・近況報告　情報共有 11月24日(金)　「パル井戸端」開催　新蛇田第一集会所　11月期　内容 座談・情報共有　(初参加者が多数だったので、自己紹介と情報交換、共有) みんなで歌う　キーボード　メンバー西村さん 参加者　サポーター10名　他参者15名　オブザーバー石巻じちれん　1名 「つながりサポーター活動　ミーティング」 12月7日(木)　新立野第一集会所　9時30分～12時 ・百歳体操の実施について、話し合い(来年度本格導入か) 12月22日(金)「パル井戸端」開催　新蛇田第一集会所　10時～12時　12月期内容

	・座談・情報共有・社会福祉協議会　浜崎　講和相談会 参加者 16 名　サポーター10 名　他参加者 6 名　社協　1 名 つながりパートナーパル活動　ミーティング １月１８日(木)　新立野第一集会所　9 時 30 分～12 時 ・広報冊子について ・１月２６日　パル井戸端　役割分担について ・歌を歌う ・メンバー仮設住宅お茶参加　２名３組 1 月 26 日(金)　「パル井戸端」開催　新蛇田第一集会所　1 月期　内容 座談・情報共有　パートナー中心に、傾聴 歌を歌いましょう　パートナー伴奏 参加者　サポーター10 名　他参者 10 名　オブザーバー石巻じちれん　1 名 つながりパートナーパル活動　ミーティング 2 月 1 日(木)　新蛇田第一集会所　9 時 30 分～12 時 ・広報冊子　校正案の決定 ・劇団ファトブルームへの依頼内容 ・2 月 23 日　パル井戸端　内容について打合せ　役割分担 ・仮設住宅訪問について　感想など 2 月 15 日(木)　新立野第一集会所　9 時 30 分～11 時 30 分 2 月 17 日(土)　劇団ファットブルーム講演と高齢者問題ワークショップ 　役割打合せ　(新立野第一集会所利用者の会として主催/別事業にて実施) 2 月 23 日パル井戸端について・・・音楽に合わせた健康体操　講師　藤原澄さん 2 月 23 日(金)　「パル井戸端」開催　新蛇田第一集会所　2 月期　内容 座談・情報共有　パートナー中心に傾聴 音楽に合わせた健康体操　講師　藤原澄さん 参加者　サポーター10 名　他参者 15 名 3 月 1 日(木)　新蛇田第一集会所　9 時 30 分～12 時 ・広報冊子　つながりパートナーパル　校正 ・平成 29 年度　振り返りと来年度の活動について ・NPO 団体活動へ組織体制を目指すことに ・3 月 23 日　パル井戸端につて内容について打合せ　役割分担

	・身近な気になることをケーススタディ 3 月 15 日(木)　新立野第一集会所　9 時 30 分～11 時 30 分 3 月 23 日(土)　パル井戸端について　からころステーションより 「精神疾患について」セミナー　依頼について打合せ 3 月 23 日(金)　「パル井戸端」開催　新蛇田第一集会所　3 月期　内容 座談・情報共有 からころステーションによる「こころのお話し」　精神疾患について学ぶ 講師　にじクリニック　西浦先生　(ボランティア) 参加者　サポーター11 名　他参者 9 名
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 7,667,435 円 (国費 5,111,623 円、県費 1,763,377 円、実施主体 792,435 円) 【内訳】 人件費 6,188,586 円、諸謝金 163,000 円、旅費 122,600 円、消耗品費 753,983 円、印刷製本費 207,790 円、通信運搬費 23,054 円、使用料及び会場借料 132,001 円、委託費 76,421 円
具体の成果	成果目標と成果 【課題・事業の必要性】 １仮設住宅団地における『つながりお茶っこ会』推進事業 ・本年度は、仮設住宅の集約の本格的進展により顔見知りの少ない新たな環境での生活を余儀なくされる住民が増加するものと予想される。一方、徐々に減少してきたとはいえ、これまでの仮設団地では集会所における定期的な住民交流の場もまま見受けられたものの、自治会役員等のコミュニティリーダーの退去が続く現在、住民交流の場が著しく減少しつつあり、これまで以上に孤立住民の増加が懸念されている。自治会等住民の自助による孤立環境の緩和に限界のある本年度は、外的支援による最低限の住民交流の場の維持は、従来以上に必要とさるものと考えられる。 ２. 復興公営住宅における住民サークル形成手法を活用した共助的見守り推進事業 ・石巻市に限らず高齢化はこれからの地域における最大の課題の一つであるが、特に震災を契機として多くの住民が入居を余儀なくされた復興公営住宅団地においては高齢化率が高く、本事業の対象地域である新蛇田地区では６５歳以上の割合が５０%を超える団地型住宅が大部分を占めている。一方、現在石巻市で進められている「地域包括ケアシステム」では、自助並びに共助による介護予防や孤立回避が目標とされているもの

	の、住民レベルでの具体的活動は本格化しておらず、そのモデル作りが模索されている段階であり、本事業もその一環として必要性が高いものと考える。 ・石巻市地域包括ケア推進の旗手である長純一医師(当会理事)によれば、介護予防には外出し他者と交流を持つことが効果が高いとのことであり、住民の自主的参加が期待されやすい住民主体によるサークル活動の推進は、この観点からも効果があるものと想定される。 ・定期的に開催していることにより、外部の支援団体からボランティア参加の申し入れがあり、タイミングの合ったお茶っこ会に参加してもらった。（スターバックスコーヒー、東北大生の足湯、吉本興業東北事務所のお笑い芸人の公演等々・・） ・当初企図した、新・旧住民の交流の場を提供するとの計画は余り効果が見られず、2～3 ヶ所の団地に止まっている。然しながら、参加者たちからは感謝され、且つ、お茶っこ会の継続開催を熱望されており、違った意味合いでのコミュニティづくりに役立っていると考えられる。 ・つながりお茶っこ会を実施していることで、当団体を通して、研修や視察、ボランティアをしたい方が、仮設住宅のみにとどまらず、問い合わせ、相談などが増え、被災地の今とニーズを「つなげる」効果があったと言える。 【事業成果（効果)】 ＜アウトプット＞ １仮設住宅団地における『つながりお茶っこ会』推進事業 ・集約拠点団地における新規入居者と既存住民との早期の交流・融和 新・旧住民の交流の場を提供するとの計画は余り効果が見られず、2～3 ヶ所の団地に止まった。 ・相対的に増加する高齢者等要援護者の居場所づくりによる孤立緩和 高齢者の居場所として、参加者たちから、お茶っこ会の継続開催を熱望されており、居場所づくりに役立ち、仮設住宅内の情報共有の場となり、結果、孤立緩和となった。 ・支援団体・行政等関係アクターとの情報共有 定期的に開催していることにより、外部の支援団体や社会福祉協議会の支援員など、お茶会に出席、社協や市の委託団体を通して、行政との情報共有がなされた。 ２復興公営住宅における住民サークル形成手法を活用した共助的見守り推進事業

	・高齢化率の高い復興公営住宅における高齢者を中心とした共助的枠組み形成 住民みまもりサークル「のぞみ野　つながりパートナーパル」発足により、基板はできた。当団体が世話役として発足しており、ファシリテート・コーディネートの役割は、当団体職員がしている。この点は、次年度の課題となる。 ・自治会等フォーマル組織が未整備の段階における住民交流の促進と地域コミュニティのシーズ形成 毎月行われる「パル井戸端」や交流バス遠足、他に所属しているサークル、自治会役員、民生委員がメンバーであることで、情報とお互いの場への行き来（交流）が生まれ、住民交流の促進につながっている。また、住民によるみまもりサークルなので、住民目線のニーズが容易に取得でき、ニーズに合わせて、セミナー、健康体操、行きたい場所、どんな悩みでどんな人に話を聞きたいか、小回りの利く対応が可能だった。（パル井戸端の参加者が増えている）その意味で、シーズ（地域コミュニティ形成コンテンツ）形成がなされ始めたと言える。（他補助事業であるが、他集会所にてセミナー開催や、他サークルと連携して、七夕会、クリスマス会などの運営をした） ＜アウトカム＞ １仮設住宅団地における『つながりお茶っこ会』推進事業 ・世間的関心の薄い震災による仮設終末期の仮設住民の状況把握・情報集積 定期開催していることにより、ネット、新聞等を見てのボランティア参加の申し入れがあり、タイミングの合ったお茶っこ会に参加してもらった。（スターバックスコーヒー、東北大生の足湯、吉本興業東北事務所のお笑い芸人の公演等々・・） ・既退去住民との交流による仮設住民の転居に伴う不安解消 元当該仮設住宅住民の参加により、再建先について、情報共有がなされたが、元仮設住民が、再建先でコミュニティに溶け込めてなく、その不安解消の場となっていた。一方で、予備知識や再建先のことを知ることで、当団体スタッフ（仮設住宅元会長）などによるフォローで、現実と向き合うきっかけとなっていた。 ２復興公営住宅における住民サークル形成手法を活用した共助的見守り推進事業 ・地域包括ケアシステムを下支えする住民主導による活動のモデル作り

	活動モデルとまでは行かなかった。方向性として、住民としてできる見守りとは、変化に敏感になり、変化を感じたら専門家へ連絡、相談することが、一年間の学びや体験で、理解し始めたところだ。一方で、認知症の関心からはじまったサークルだが、障害、心の病、社会保障制度についてなど、みまもり活動に必要な知識習得、体験へと意識が進み、地域包括ケアシステムのみならず、福祉面での総合的学びから、社会福祉協議会などの地域福祉隊に準ずるサークルへと進化している。 ・サークル等インフォーマル組織活動を通じたコミュニティの担い手発掘と自治会等フォーマル組織形成のシーズづくり みまもり、高齢者問題解決のサークルであり、自分のこととして受け止め、意識の高いメンバーが集まっている。その意味で、コミュニティの担い手発掘につながっているが、高齢者も多く、メンバー増員活動に力を入れなければならない。また、自治会等フォーマル組織形成のシーズづくりに関して、自治会形成段階と重なり、戸建て住民との交流促進(メンバーが公営・戸建てより入会している)のきっかけ程度にとどまっていると考える。一方で、団地組織、自治組織に、役員としてメンバーが積極的に参加し、それらをサポートする形が、当団体の役割となった。(間接的にサークルサポートがメンバーのサポートとなっている)
平成30年度以降の活動計画	石巻市では、仮設住宅は30年度も一部残ることになっている。そのため、以下の流れで活動継続をしていく。 ・一部仮設住宅にてお茶会の定期開催継続 ・仮設住宅から復興公営住宅のコミュニティ支援へ移行(元仮設住民からの要望多) ・復興公営住宅の現状と復興公営住宅間の情報共有の場づくり ・必要ならば、復興公営住宅間の問題解決連携サポート(団地会要請ありの場合) 昨年度から、別事業で味の素料理教室(石巻じちれん主催)にて、石巻市内復興公営住宅にても行っており、住民からの相談は増えている。 ・みまもりサークル「つながりパートナーパル」の活動サポート サークルとはいえ、今年度は会則などの整備にまでいたらず、その必要性に関して、熟慮する時間となった。NPO団体として会則を定め、みまもり活動を本格的にスタートすることになっている。 ・サークル冊子にて、サークル参加者を増やし ・NPO団体発足、社会福祉協議会などの活動に参画 ・つながりカード普及活動にて、孤立を防ぐ活動を団体としてサポートしな

	がら、普及活動に移る。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興･被災者支援の実施に関わった団体数は６団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（１）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－８
事業名	地域コミュニティにおける、はじめの一歩サポート事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人とめタウンネット（コミュニティサポート・人材育成）事業実施主体として本事業全体を総括する。 【参画した団体（ＮＰＯ等）】南三陸町福祉協議会内南三陸町被災者支援センター（告知等）、みやぎ学生ボランティアユニオン（宮城県内大学の横断的ボランティア）学生ボランティアのコーディネート・カフェ運営サポート 【参画した団体（ＮＰＯ等以外）】（株）南三陸まちづくり未来（各種講座告知支援）、有限会社コンテナおおあみ（起業・創業者支援）コミュニティカフェ開業及び運営についての助言及びビジネスサポート
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【事業内容】 はじめの一歩サポートアカデミー事業 　昨年実施した、コミュニティカフェ解説講座に加えて、コミュニティペーパー制作講座とコミュニティビジネス開業講座を今年度は実施することから、事前に説明会を開催し、講座の内容や必要性を丁寧に説明した。また、説明会に参加いただいた方々に、現在の生活状況をお聞きしたところ、概ね災害公営住宅や、復興住宅へお住まいとのことだが、住宅内のコミュニケーションが取れているわけではないようで、孤立し始めている高齢者も多数見受けられるとの事だった。南三陸町の社会福祉協議会では、見回りなどを頻繁に行っているようだが、我々も連携して住民皆様の居場所づくりや生きがいづくり、しごとづくりを進めていく必要を改めて実感した。 ・居場所づくり事業「コミュニティカフェ開設講座　圧縮版」 南三陸会場 ①９月２９日に第１回（地域の魅力と地域の課題を知るワーク）を実施した。南三陸町のさんさん商店街で営業しているニュースタンドサタケ様による多様な店舗活用事例を参考にしながら、受講生みんなで商店街に於ける居場所づくりの新しいアイディア出しを行った。受講生の発案によりニュースタンドサタケ様を会場にミニイベントを企画する事となった。 ②１０月１８日に第２回（自分の強み・弱みワークシートづくり）を実施した。気仙沼から参加した受講生から、コミュニティカフェとは何ですか？と

	の質問を頂き、事例に基づいてコミュニティカフェの概要を説明した。また、受講生みんながそれぞれ企画する、コミュニティカフェの立案を通じた、自分自身を改めて理解するワークショップを行い改めて自分の強みや弱点を理解出来たようで好評な講座となった。 ③１１月１０日第３回（自分の思う居場所ってどんな場所）を移動講座として気仙沼市のNPO法人生活支援プロジェクトＫ様を会場に、気仙沼市階上地区での高齢者への生業支援（編み物カフェ）の取組をもとに、地域に必要とされる居場所づくりとは何かを話し合う機会とした。参加した地域住民の方々から現在の階上地区災害公営住宅での生活や、現在の生活課題等について聞き取りをし、人口流出が目立つ地域であり新しい地域コミュニティ作りが急務との事で若い世代との交流推進を図り地域コミュニティでの居場所を作っていきたいとの意見を頂く事が出来た。 登米会場 ④１月６日に第１回（地域の魅力と地域の課題を知ろうワーク）を実施した。今回受講して頂いた方々はコミュニティカフェの概論が知りたい方々が多く、コミュニティカフェ等の地域に於ける居場所の必要性や、コミュニティカフェの多様性などを学ぶ事となった。また、自らのスキルを活かして開設したい方々も多数いる事から、さっそくそれぞれの企画案作りに取り組んだ。 ⑤１月２７日に第２回（自分の強み・弱みワークシートづくり）を実施した。前回の参加者が多く、登米市や他地域でのコミュニティカフェの開設状況や取り組んでいる事例を共有し、自ら開設する事をイメージした自分の強みや弱点を理解し、課題解決に至るスキームを理解した。事業計画も作成し今後各自更に計画を深め、磨き上げていくこととした。 ・生きがいづくり事業「コミュニティペーパー制作講座」 南三陸会場 ①９月２１日に第１回（フリーペーパーってどんな読み物）を実施した。以前、復興支援フリーペーパー「フォーチュン宮城」を発刊していた当時の、編集長河崎氏によるフリーペーパーの概論をお聞きした後、受講生それぞれがフリーペーパーの活用法を考え発表した。 ②１０月４日に第２回（取材の仕方や編集の仕方を学ぼう）を実施した。地元河北新報社の記者による取材時の取材相手に対する心得や、事実を聞き取る大切さなど、普段では聞く事の出来ない貴重な話を伺うことが出来た。また、志津川の東地区にて町内会報誌を作ってみたいとの要望もいただき、今後取

	り組んでいく事とした。 ③１１月１０日に第３回（センスのいいカメラ技術を学ぼう）を実施した。仙台にてフリーの映像クリエイターをしている三塚氏をお招きし、実際に自ら作られた、平泉の観光動画を視聴した後、カメラワークや構図、色調の表現など細部にわたり説明いただいた。また、受講生が実際に撮影をしてみて撮影した画像のテーマや、伝えたい内容などをお互い発表した。 登米市会場 ④１２月１６日に第１回（掲載の特徴の捉え方・記憶に残る記事の書き方）を実施した。登米市内にてフリーペーパー「アルク」を発刊している（株）シーアーツ代表取締役佐々木社長をお迎えして、アルクで掲載している店舗の特徴ある記事の作成方法や、キャッチコピーの使い方、読者が感じる良いキャプションの付け方などを学んだ。実際にフリーペーパーづくりを行っている事から読者目線の記事の作り方や記事の校正法なども学ぶ事が出来大変ためになる講座となった。 ⑤１月２０日に第２回（取材の仕方や編集の仕方を学ぼう）を実施した。前回同様登米市内にてフリーペーパー「アルク」を発行している（株）シーアーツ代表取締役佐々木社長をお迎えして取材時の注意ポイントや、記事の編集時のアドバイスを伺った。また、受講いただいた皆様がそれぞれ作りたい冊子について意見交換し、冊子づくりに今後チャレンジしていく事を確認していた。 ・しごとづくり事業「コミュニティビジネス開業講座」 南三陸会場 ①９月２０日に第１回（自分でやってみたい事発見ワーク）を実施した。弊法人の松原理事に講師をお願いし、受講生それぞれが得意な事や、好きな事をノンジャンルで数多く発表し合い、他の人から見える自分を発見するワークショップを行った。受講生は新たな自分の一面を知って、今後行う仕事づくりに大いに生かせそうだと語っていた。 ②１０月１９日に第２回（小さな仕事のはじめ方と続け方）を実施した。大崎市に於いて起業家支援を行っている（株）スリーデイズ伊藤理恵代表を講師に迎え、大崎市にて起業をした女性の事例を学び、受講生がビジネスプランをそれぞれアドバイス頂いた。 ③１１月８日に第３回（自分でやりたい事をまとめてみよう）を実施した。講師より事業は始めるのは簡単だが継続は難しいので始まりの気持ちに立ち返る。市場でＮｏ．１になる事を考え、内容を絞る事やコンセプトを固める

	事も大切である旨のお話しを頂いた。 登米市会場 ④１２月９日に第１回（初めてのアグリビジネスセミナー）を実施した。登米市に移住して農業で起業された「おかやち農園」三上様をむかえて、多品種少量の生産により、季節に応じた旬の野菜を無農薬で栽培している事により、他の生産農家との差別化が図られ首都圏をはじめ仙台市内などに契約消費者が増え始めているとのお話を伺った。誠実に野菜を作る事と、販売先の確保が事業を継続させる最大のポイントである事を学んだ。 ⑤１月１３日に第２回（小さな仕事のはじめ方と続け方）を実施した。すでに飲食店で起業されている受講生のこれまでの経過を元に、受講生全員でブレインストーミングし今後の課題や、改善点などの意見を出し合った。事業を始めるときは想いが強く、始めて時間が経過した時にはやや想いが薄れていき継続が難しくなる事が多々ある。事業を続けるためには臨機応変な対応や、多くの協力者を獲得する必要がある事を学んだ。 はじめの一歩サポートセンター事業 ・はじめの一歩相談会 　８月に入り、はじめの一歩サポートセンターの開設準備と無料相談会の告知を同時進行で行い、８月２６日に開設することが出来た。また、９月２日（土）から無料相談会を実施し、毎週土曜日、午前中は登米市、午後は南三陸町にて多くの相談を受ける事が出来た。相談内容は、コミュニティカフェの開設や、飲食店の開業などかなり現実的な内容の相談が多く、これまでに相談する場所がなかった事が理解出来、必要である事も立証された。また、補助金や補助事業についての問い合わせも多く、経済産業省や宮城県また、登米市や南三陸町などで行っている様々な支援策をお伝えした。 フリーペーパー作成事業 ・南三陸町の商店街と地元住民を繋ぐフリーペーパーまるまる発刊 　南三陸町のさんさん商店街（ニューススタンドサタケ様）を会場に各種講座を実施してきたが、講座に参加していただく方々に商店街に対する意見を聞き取りしてみたところ今回の講座や各種イベントがないと商店街に来街する機会は非常に少なく、普段の生活に必要な買い物の為に商店街を訪れる事はほとんどないとの意見が多数を占めた。大正大学が行った商店街の来街者調査によれば、南三陸さんさん商店街への訪問客の９割は他地域からの観光客で、地元南三陸町民は１割程度である事が調査の結果明らかになった。改めて南三陸町志津川東地区の災害公営住宅の住民の方々に商店街の利用

	について聞き取りを行ったところ以下の課題がある事が判明した。 　①災害公営住宅から徒歩では商店街を訪れる事は距離的に不可能である。 　②自家用車を所有していない。他者に乗せていってもらった事はある。 　③商店街の商品は観光客向きで割高であり、年金生活者が購入する事は難しい。 　④震災前の商店主から代替わりしており伺いづらくなっている。 　⑤商店街自体が観光客に向けて商売をしているように感じる。町民向けではないように感じる。 　本課題を解決するべく今回の各種講座の受講生と意見交換を行ったところ、南三陸町民向けに現在の商店街を伝える冊子を作成し南三陸町の協力の下町内の各戸に配布し、町民の皆様の誘客を図る事とした。冊子の制作に至っては記事の編集や撮影の経験ある方々に協力を頂きながら、印刷以外の作業を受講生と商店街の協力店舗で手分けして行った。１月末・２月末・３月末と３回発行し多くの町民から評価をいただく事が出来た。 　南三陸町商店街と地元住民を繋ぐフリーペーパー　まるまる　第１号　４５００部発刊 　南三陸町商店街と地元住民を繋ぐフリーペーパー　まるまる　第２号　４５００部発刊 　南三陸町商店街と地元住民を繋ぐフリーペーパー　まるまる　第３号　４５００部発刊 【スケジュール】 ７月 3 日（月）全体ミーティング ・平成 29 年度　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業の説明 ・年間活動内容について ・説明会チラシのデザイン企画打ち合わせ ・チラシ配布先の検討 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 7 日（金）スタッフミーティング ・各種講座内容の確認 　コミュニティビジネス開業講座 　①自分でやってみたい事を発見ワーク

	②小さな仕事のはじめ方と続け方 ③自分でやりたい事をまとめてみよう （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 10 日（月）全体ミーティング ・各種講座内容の確認 ・説明会チラシのデザインの確定及び発注 ・チラシ配布先の確定 コミュニティペーパー制作講座 ①フリーペーパーってどんな読み物？ ②取材の仕方や編集の仕方を学ぼう ③センスのイイ　カメラ技術を学ぼう （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 14 日（金）スタッフミーティング ・各種講座内容の確認 コミュニティカフェ開設講座 ①地域の魅力と地域の課題を知ろうワーク ②自分の強み・弱みワークシートづくり ③自分の思う居場所ってどんな場所 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 14 日（金）はじめの一歩サポートアカデミー説明会準備 ・登米市内チラシ配布 （迫総合支所、登米総合支所、東和総合支所、中田総合支所、豊里総合支所、米山総合支所、石越総合支所、南方総合支所、津山総合支所、北方公民館、錦織公民館、東郷公民館、豊里公民館、森公民館、迫町公民館、米谷公民館、南方公民館、米山公民館、新田公民館、登米公民館、米川公民館、吉田公民館、中津山公民館、石越公民館、西郷公民館、津山公民館、石森ふれあいセンター、宝江ふれあいセンター、上沼ふれあいセンター、浅水ふれあいセンター） （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 15 日（土）はじめの一歩サポートアカデミー説明会準備 ・南三陸町チラシ配布 （南三陸支所、歌津総合支所、戸倉公民館、入谷公民館、歌津公民館） （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 18 日（火）全体ミーティング ・各種講座内容の確定及び講師の確定

	・南三陸会場（説明会）の進行確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 21 日（金）はじめの一歩サポートアカデミー　説明会（南三陸） 　①コミュニティビジネス開業講座 　②コミュニティペーパー制作講座 　③コミュニティカフェ開設講座 ・講座内容とスケジュールについて （まとめ） 　南三陸ポータルセンターにて志津川東地区、復興住宅の住民の方々に多く参加していただき説明会を実施した。昨年実施した講座に今年度はコミュニティビジネス開業講座、コミュニティペーパー制作講座を新たに含め実施することを中心に説明した。社会福祉協議会の方々にも出席いただけたので連携の上取り組んでいく。 （参加者数：事務局１名、スタッフ２名、受講者 15 名　合計 18 名） 24 日（月）全体ミーティング ・登米会場説明会にむけて進行等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 28 日（金）はじめの一歩サポートセンター　説明会（登米市） 　①コミュニティビジネス開業講座 　②コミュニティペーパー制作講座 　③コミュニティカフェ開設講座 ・講座内容とスケジュールについて （まとめ） 　コンテナおおあみにて、地域支援や障碍者支援に取り組んでいる団体の方々や、仮設住宅、災害公営住宅の住民の方々に参加していただき説明会を実施した。コミュニティカフェ開設に向けて参加したいとの意見や、地域のフリーペーパー制作に興味があるとの声も伺えた。 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名、受講者 10 名　合計 14 名） 31 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩サポートセンター開設準備打ち合わせについて （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） ８月 7 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩サポートセンター開設準備打ち合わせについて （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名）

	８日（火）はじめの一歩サポートセンター　開設準備 ・はじめの一歩サポートセンターチラシデザイン企画、構成打ち合わせについて （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） ９日（水）スタッフミーティング ・南三陸会場の場所検討及び進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 10 日（木）はじめの一歩サポートセンター　開設準備 ・チラシ配布場所検討 ・チラシ配布依頼分作成 ・無料相談日の確定及び検討 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 18 日（金）はじめの一歩サポートセンター　開設準備 ・チラシの発注 ・無料相談のブースの設置 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 21 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩サポートセンターの開設準備状況について （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 22 日（火）はじめの一歩サポートセンター　開設準備 ・はじめての一歩サポートセンターチラシの配布 （戸倉公民館、入谷公民館、歌津公民館、北方公民館、錦織公民館、東郷公民館、豊里公民館、森公民館、迫町公民館、米谷公民館、南方公民館、米山公民館、新田公民館、登米公民館、米川公民館、吉田公民館、中津山公民館、石越公民館、西郷公民館、津山公民館、石森ふれあいセンター、宝江ふれあいセンター、上沼ふれあいセンター、浅水ふれあいセンター、） （参加者数：事務局１名、スタッフ５名　合計６名） 23 日（水）スタッフミーティング ・はじめの一歩サポートセンター開設役割分担 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 26 日（土）はじめの一歩サポートセンター　開設（南三陸、登米市） 29 日（火）はじめの一歩サポートアカデミー ・チラシ配布（戸倉公民館、入谷公民館、歌津公民館） （参加者数：事務局１名、スタッフ５名　合計６名） 30 日（水）はじめの一歩無料相談会　準備作業

	・受付用書類作成 （参加者数：事務局１名、スタッフ２名　合計３名） ９月 2 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） （まとめ） 　登米会場では、第一回無料相談会ということでコミュニティカフェの開設を希望する女性２名が参加された。今後講座受講を経て具体的な取組を進めていく。また、南三陸会場では、商店街の広報誌を作りたいとの相談のもと、今後作成に向けて商店街の方々と企画打ち合わせを進めていくこととなった。 4 日（月）全体ミーティング ・南三陸　登米市はじめての一歩サポートセンター開設報告 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 6 日（水）スタッフミーティング ・南三陸　登米市はじめての一歩サポートセンターにむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 9 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者０名　合計１名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） （まとめ） 　登米会場では無料相談会の当日相談者が現れず、参加者拡大に向けてピーアールをはかっていきたい。南三陸会場ではコミュニティカフェを開設したい子育て世代の女性からの相談があった。自宅を改装してカフェを開業したいとのお話を伺い、かなり具体的なところまで進んでいることから、資金面や補助制度などの活用法など提案していく事となる見込み。南三陸町に女性たちの居場所が増えることは大変大事なことであるため、これからも陰ながら支援していく。 11 日（月）全体ミーティング

	・南三陸　登米市はじめての一歩サポートセンター無料相談打ち合わせについて （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 13 日（水）スタッフミーティング ・各種講座①にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 16 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） （まとめ） 　登米会場では現在カフェを経営されている方から活用できる補助金等の相談があり、登米市のビジネスチャンス支援事業をご提案した。また、南三陸会場では商店街の広報誌作成について発行日や、紙面内容について２回目の打ち合わせを行なった。 19 日（火）全体ミーティング ・各種講座①に向けて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 20 日（水）コミュニティビジネス開業講座①（南三陸） 　①自分でやってみたい事を発見ワーク 　②時間 10：00～12：00 （まとめ） 　受講者は、お仕事をされている人、高齢者、主婦、若いママさん方に多数参加していただいた。受講生の皆さんに自己紹介をかねて趣味、特技を発表していただきながら、現在行っている事業は仕事として成り立っていけるのか、本当にやってみたい事なのかを皆さんで意見交換をしながら、本当の自分を再認識する場として、理解を得ていただけた。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者６名　合計９名） 21 日（木）コミュニティペーパー制作講座①（南三陸） 　①フリーペーパーってどんな読み物？ 　②時間 10：00～12：00 （まとめ） 　受講された方々は講座の内容である、フリーペーパーってどんな読み物？

	の質問を通じて仕事に活用したいがどのように今後製作したらよいかとの意見が多くあった。講師より今まで発行してきたフリーペーパー（FORTUNE宮城）を元に制作にあたった説明をしていただき、気仙沼市在住の受講者からは仕事に活用したいがどのように今後製作したらよいか？との意見があり、受講者全員でフリーペーパー制作に向けた意見交換を行った。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ１名、受講者５名　合計８名） 25日（月）全体ミーティング ・各種講座の進行等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 29日（金）コミュニティカフェ開設講座①（南三陸） 　①地域の魅力と地域の課題を知るワーク 　②時間10：00～12：00 （まとめ） 　受講者の方で南三陸さんさん商店街の人気カフェ・雑貨店の店主の方に開店に至るまでの経緯などのお話を伺った。河北新報新聞販売も始められカフェスペースを利用して新聞折込みもしているらしく店舗を多様に活用されていて、講師の先生にカフェ・運営での来客が増加する手法などのアドバイスや自店でのイベント企画のたてかたについて等講義していただいた。講師の先生と協力してミニイベント開催する事も決まったようだ。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者６名　合計10名） 30日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） （まとめ） 　登米会場では昨年のコミュニティ開設講座受講者の女性が、来年３月以降、地元栗原市にてコミュニティカフェ開設するとのことにより行政との手続きや、資金面の相談に訪れた。南三陸会場では地元ママサークルの子育て中の女性から皆で集まれるイベントを開催したいとの相談を受け、次回具体的にイベント内容を考えプロジェクト化することとした。資金面についてはクラウドファンディングをご紹介し、無理のない運営に心がける事も付け加えさせていただいた。

	１０月 2 日（月）全体ミーティング ・南三陸　各種講座①を終えての振り返り ・各種講座②にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 4 日（水）コミュニティペーパー制作講座②（南三陸） 　①取材の仕方や編集の仕方を学ぼう 　②時間 10：00～12：00 （まとめ） 　講座は身近な趣味のサークルの会報誌や冊子づくりの意見交換、作成をし取材の仕方や、編集の仕方を講師よりアドバイスをいただいた。新しい自治会や町内会の会報づくりにも役立てたいとの声も寄せられた。 （参加者数：事務局 1 名、講師 1 名、スタッフ 2 名、受講者 10 名　合計 14 名） 7 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10；00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 2 名　合計 3 名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 2 名　合計 3 名） （まとめ） 　登米会場では登米市に移住して就農されたご夫婦から生産物の販路拡大や加工についての相談があった。南三陸会場では養殖業営む方から飲食店を経営してみたいとの相談を受け、今後計画づくりをお手伝いすることにした。 10 日（火）全体ミーティング ・各種講座②にむけての進行・作業等の確認 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 11 日（水）スタッフミーティング ・南三陸　各種講座①を終えての振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 2 名　合計 3 名） 14 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 2 名　合計 3 名） ・南三陸　時間 14：00～16：00

	（参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） （まとめ） 　登米会場では７日にご相談に来られたご夫婦の先週に引き続き加工品開発についてのご相談を受けた。南三陸会場では商店街の広報誌づくりについて掲載する具体的な内容や誌面のデザインについて等、発行時期の相談を受けた。 16 日（月）全体ミーティング ・各種講座②にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 18 日（水）コミュニティカフェ開設講座②（南三陸） 　①自分の強み・弱みワークシートづくり 　②時間 10：00～12：00 （まとめ） 　受講者からコミュニティカフェってな～に？の意見があり、講師から事業の内容説明していただき、地域の居場所、まちの縁側を気軽に地域の活性化や福祉関係者、子ども達が集う「コミュニティカフェ」が実現に向けて誰でも自由にカフェを開くことができるよう企画を考え意見交換をした。気仙沼市在住の受講者は朝市屋台でコーヒーを提供されているとのことだった。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 13 名　合計 17 名） 19 日（木）コミュニティビジネス開業講座②（南三陸） 　①小さな仕事のはじめ方と続け方 　②時間 10：00～12：00 （まとめ） 　講座は女性のキャリアと起業の説明から小さな仕事をはじめた人々（事例紹介）をビデオにて観賞、自分が仕事を始める予定のコンセプトを考え、受講者の方々に発表をしていただいた。講師からは、はじめることより、続けることの方が難しい、計画を立てて起業する、状況にあわせて柔軟に変更すること、経営資源が不足するなど受講者にアドバイスをいただいた。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 12 名　合計 16 名） 21 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） ・南三陸　時間 14：00～16：00

	（参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） （まとめ） 　登米会場では先週に引き続き相談に来られたご夫妻の加工品開発で具体的な相談を受けた。南三陸会場では先週に引き続き商店街の広報誌づくりについて掲載する具体的な内容や紙面のデザインについて等、発行時期の相談を受けた。 23 日（月）全体ミーティング ・各種講座②を終えての振り返り （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 25 日（水）スタッフミーティング ・各種講座②を終えての振り返り （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 28 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） （まとめ） 　登米会場では前回相談を受けたコミュニティカフェ開設講座受講者の女性が、来年３月以降、地元栗原市にてコミュニティカフェ開設することが具体的になり相談に訪れた。南三陸会場では地元ママサークルの子育て中の女性から皆で集まれるイベント開催について具体的になったので打ち合わせを行った。 30 日（月）全体ミーティング ・各種講座③にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） １１月 1 日（水）スタッフミーティング ・各種講座③にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 4 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名）

	（まとめ） 　登米会場では子育て中の女性が趣味や特技を活かした仕事がしたいと相談に訪れた。南三陸会場では養殖業営む方から飲食店を経営してみたいと2回目の相談を受けた。 6日（月）全体ミーティング ・各種講座③にむけて進行・作業等の確認 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 8日（水）スタッフミーティング ・各種講座③にむけて進行・作業等の準備 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 8日（水）コミュニティビジネス開業講座③（南三陸） 　①自分でやりたい事をまとめてみよう 　②時間10：00～12：00 （まとめ） 　南三陸会場での講座は前回の「小さな仕事のはじめ方と続け方」の続きで始まった。事業は始めるのは簡単、継続は難しい、始まりの気持ちに立ち返る。市場でＮｏ．１になる事を考え、内容を絞る事、コンセプトを固める事も大事と講師の先生よりお話があった。各受講者は事業の提供する商品・サービスで具体的なお客様になりきり話を進めて意見交換をした。商品を磨き、商品の適正価格を付ける、原点に立ち返る。なぜ、起業したのか？誰に、何をどうして提供したいのか、販促費用と売上・利益の関係など、詳しいアドバイスを講師の先生よりいただいた。 （参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者10名　合計14名） 9日（木）コミュニティペーパー制作講座③（南三陸） 　①センスのイイ　カメラ技術を学ぼう 　②時間10：00～12：00 （まとめ） 　南三陸会場での講座は講師の先生の自己紹介に始まり、講師の先生の実際に撮影した映像観賞から始まった。とても映像が素晴らしく受講生の方々は感動の嵐だった。伝わる写真の撮り方の中で、記事にマッチする写真とは？何を伝えたいのか？構図の使い方等、詳しい内容説明が有り、カメラの技術面でも色々とご指導をいただき受講者はスマホで撮影した写真を元に意見交換をした。記録を残す、テーマを持つ、撮影回数こなすと良くなるなどア

	ドバイスをいただいた。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名） 10 日（金）コミュニティカフェ開設講座③（気仙沼市） 　自分の思う居場所ってどんな場所 （まとめ） 　講座は気仙沼市の生活支援プロジェクトＫさんの場所をお借りして西城さんに活動の一部のお話を伺った。階上の長磯原と長磯浜地区をまたいでできた防災集団移転と災害公営住宅の力「長磯浜ふれあい館」という新しくコミュニティセンターができ、地域の皆さんの交流の為にと無料で開放されており、近隣の住民の方々から「自分たちだけではなかなか使いにくい」他にも色々な声を聞き、『だれがいだのすかー？』と言えば『いだでば、あがらい。』と言う関係性を作りたいと思い、8 月より『いだでばプロジェクト』として新たな活動が生まれ、毎週木曜日の午前中にふれあい館に行って、ただそこに居る、そんな活動との事だった。受講者の方々で「長磯浜ふれあい館」の見学に行き、今後コミュニティセンターの使用方法を考えていく必要があると意見交換をした。 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名） 11 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） （まとめ） 　登米会場では子育て中のママや子ども達が楽しめる場所や交流できる場の開設の相談を受けた。南三陸会場では養殖業営む方から飲食店経営が具体的になったとの事で資金面や補助金制度の相談を受けた。 13 日（月）全体ミーティング ・各種講座③を終えての振り返り ・hug マルシェチラシ配布 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 15 日（水）スタッフミーティング ・各種講座③を終えての振り返り ・hug マルシェチラシ配布

	（参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 18 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者２名　合計３名） （まとめ） 　登米会場では前回同様に、子育て中のママや子ども達が楽しめる場所や交流できる場の開設としてコミュニティカフェ開設に向けての相談を受けた。南三陸会場では商店街の広報誌づくりについて前回同様、掲載する具体的な内容や誌面のデザインについて等、相談を受けた。 20 日（月）全体ミーティング ・hug マルシェの進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 22 日（水）スタッフミーティング ・hug マルシェの進行・作業等の確認 （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 23 日（木）hug マルシェ・はじめの一歩マナー講座　実施 ・会話力＆マナーアップセミナー （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名） （まとめ） 　講座の受講者は、子育て女性が対象でしたが他にもたくさんの方々に参加していただき実施した。本セミナーにおける会話力アップ女性目線からと、男性目線から見た言葉のキャッチボールが必要であり、相手に誠実な関心を持ち、ありのままに受け容れて尊重する事、役に立とうとする姿勢や、情報や気づき・感動や笑いや共感・快＆ラクでいつもでもどこでも、相手にハピネスの気持ちになってもらうことが大事とのこと。就活必勝のカギは、自分プロデュースとマッチング・シナリオ＝自分が思う自分と、人から見た自分は、案外違うもの、自分の評価を自分で創り、現在・未来事項で付加価値づけし、自分の市場性を高めてポイント絞ったアピールが必要とのこと。時折、先生の実体験に基づいたお話を交えての講座となり受講者の皆さんも楽しく参加されていた。 25 日（土）はじめの一歩無料相談会　実施 ・登米市　時間 10：00～12：00

	（参加者数：事務局１名、受講者０名　合計１名） ・南三陸　時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局１名、受講者１名　合計２名） （まとめ） 　登米市会場では、無料相談会の当日相談者が現れず再度参加者拡大に向けてピーアールを図っていく。南三陸会場では気仙沼市在住の方が、地元スーパーマーケットで包丁研ぎとコーヒーを出している。他に仕事拡大で訪問包丁研ぎをしたいと相談にみえた。 27 日（月）全体ミーティング ・hug マルシェの振り返り （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 29 日（水）スタッフミーティング ・hug マルシェの振り返り （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） １２月 4 日（月）全体ミーティング ・登米市講座①の開設準備の打ち合わせ ・登米市講座のチラシ打合せ及び配布 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 6 日（水）スタッフミーティング ・登米市講座①の開設準備の打ち合わせ ・登米市講座のチラシ打合せ及び配布 （参加者数：事務局１名、スタッフ４名　合計５名） 9 日（土）コミュニティビジネス開業講座①（登米市） 　①初めてのアグリビジネスセミナー 　②時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局１名、講師１名、スタッフ２名、受講者 10 名　合計 14 名） （まとめ） 　講座は登米市に移住定住した「おかやち農園」の三上さんに移住定住した経緯、農園のお仕事、生活の様子などお話を伺った。娘さんが食物アレルギーを持っていることが分かり、農薬と化学肥料を使わず基本的には路地畑で栽培しているとのこと。おいしい野菜を食べたくて農家になったとのお話をされており、参加者の方々は是非食べたいと注文されていた。 9 日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施

	・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　登米市会場での相談会では、相談者は株式会社まちおもい様が登米市東和町米谷地区の古民家を活用したゲストハウスを開業したいとの相談を受けた。開業時に活用できそうな補助金や助成金の情報を中心に、他地域での事例や必要資金の精査と事業計画の立案方法を指導した。 11 日（月）全体ミーティング ・登米市講座①の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 13 日（水）スタッフミーティング ・登米市講座①の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 16 日（土）コミュニティペーパー制作講座①（登米市） 　①掲載の特徴の捉え方・記憶に残る記事の書き方 　②時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、講師 1 名、スタッフ 2 名、受講者 8 名　合計 12 名） （まとめ） 　講座のテーマは掲載店舗の特徴の捉え方と、記憶に残る記事の書き方フリーペーパーアルクの編集長である佐々木敦様をお迎えして、アルクに掲載している店舗の特徴を捉えた紹介法をアルクの紙面を参考に開設いただいた。また、イベント情報等での記憶に残るキャッチコピーの使い方や、個性あるキャプション(タイトル)の発想方法と読者の目線に沿った記事の校正等を教わることが出来た。 16 日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　南三陸会場では、相談者にハンドメイドマモイ様に南三陸被災者支援センターと協働で開催するイベントについての相談を受けた。ハンドメイドマルシェを開催したいようであり、出店料の金額設定や、来場者の確保、PR 方法等多岐にわたった相談となった。マルシェを年間通じて実施していきたいとのことから、当初は手作り感のあるイベントとし、回数を重ねるごとに運営方式も変更させて行くように指導した。

	18 日（月）全体ミーティング ・登米市各種講座①の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 20 日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座①の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 25 日（月）全体ミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の確認 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 27 日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の確認 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） １月 6 日（土）コミュニティカフェ開設講座①（登米市） 　①地域の魅力と地域の課題を知ろうワーク 　②時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、講師 1 名、スタッフ 2 名、受講者 8 名　合計 12 名） （まとめ） 　コミュニティカフェ開設講座講師の自己紹介で始まり、受講生からコミュニティカフェっとはどのようなものかとの質問があった。コミュニティカフェは（地域の居場所、まちの縁側）として、地域の高齢者、障害者、子育て女性、子ども達が集う場所であり、誰でも自由にカフェを開くことが出来る為のスキルを身に着け、実現に向けて受講者の方々でそれぞれの企画を考え意見交換をした。 6 日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　登米市会場での相談会では、前回に続き株式会社まちおもい様が登米市東和町米谷地区の古民家を活用したゲストハウスを開業したいとの相談にみえた。具体的な改修工事の内容を打ち合わせした。 9 日（火）全体ミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の準備 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名）

	10日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の準備 ・フリーペーパーまるまる制作打合せ （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 13日（土）コミュニティビジネス開業講座②（登米市） 　①小さな仕事のはじめ方と続け方 　②時間10：00～12：00 （参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者8名　合計12名） （まとめ） 　受講者は、高齢者の方々、主婦、子育て中の女性と多世代の方々に参加していただいた。講座内容は大崎市内で起業した女性の事例をビデオにて鑑賞した。自分が仕事を始める為のコンセプトを考え、それぞれ受講者の方々に発表をしていただいた。講師の先生からは、小さな仕事は、始める事より続ける事の方が難しい、事前にしっかりとした計画を立ててから起業し、起業後も様々な状況にあわせて柔軟に変更することなども必要とのアドバイスがあった。 13日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間14：00～16：00 （参加者数：事務局1名、受講者1名　合計2名） （まとめ） 　南三陸会場では前回同様に、気仙沼市在住の方が地元スーパーマーケットで包丁研ぎとコーヒーを出している。他に仕事拡大で訪問包丁研ぎをしたいとのことで2回目の相談にみえた。チラシの作成や具体的な内容の検討をした。 15日（月）全体ミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の準備 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 17日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座②の進行・作業等の準備 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 20日（土）コミュニティペーパー制作講座②（登米市） 　①取材の仕方や編集の仕方を学ぼう 　②時間10：00～12：00 （参加者数：：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者6名　合計

	10 名） （まとめ） 　講座は、高齢者、主婦の方々、お仕事をされている人等の出席があり、自治会や、町内会の会報づくりや、身近な趣味のサークルの会報誌・冊子づくりの内容について意見交換をした。また、実際の取材の仕方や、編集の仕方を講師の先生よりアドバイスいただいた。 20 日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、受講者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　登米市会場では地元ママサークルの子育て中の女性から皆で集まれるイベント等の相談を受けた。 22 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩無料相談会のまとめ （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 24 日（水）スタッフミーティング ・はじめの一歩無料相談会のまとめ （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 27 日（土）コミュニティカフェ開設講座②（登米市） 　①自分の強み・弱みワークシートづくり 　②時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、講師 1 名、スタッフ 2 名、受講者 6 名　合計 10 名） （まとめ） 　受講者は子育て女性、高齢者、ご夫婦の方々が参加された。実際にコミュニティカフェ事業をしている方の事例紹介を講師の先生より説明していただいた。地域の居場所、まちの縁側を気軽に地域の活性化に向けて、福祉関係者や子ども達が集える場とし「コミュニティカフェ」の実現の為に様々な意見やアイディアを中心に話し合われた。 27 日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、参加者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　気仙沼市在住の方が 3 回目の相談にみえた。地元スーパーマーケットで包丁研ぎとコーヒーを出しているが訪問で包丁研ぎをしたいとのことだった

	ので、チラシ配布やどの様にピーアールをはかっていくか具体的な内容の打ち合わせをした。 29 日（月）全体ミーティング ・登米市各種講座③の進行・作業等の準備 （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 30 日（火）フリーペーパーまるまる創刊号発刊 ・南三陸町４５００戸へ各戸区長配布 31 日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座③の進行・作業等の準備 （参加者数：事務局 1 名、参加者 1 名　合計 2 名） ２月 3 日（土）コミュニティビジネス開業講座③（登米市） 　①自分でやりたい事をまとめてみよう 　②時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、講師 1 名、スタッフ 2 名、受講者 6 名　合計 10 名） （まとめ） 　講座は前回の「小さな仕事のはじめ方と続け方」の続きで始まった。各受講者は事業を始める場合、提供する商品を磨き上げ、商品の適正価格を付ける事が必要となる。なぜ、起業したのか？誰に何をどうして提供したいのか？等それぞれの状況に応じた活動内容を、事例を交えて伺うことが出来た。受講者はそれぞれのビジネスプランを発表し、そのプランごとに意見交換した。また、ビジネスプランの具体的な手法を講師の先生よりそれぞれアドバイスを頂いた。 3 日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、参加者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　子育て中の女性が趣味でアクセサリーを作っているが、子供に手がかかり外出も出来ないが、自ら販売してみたいとの悩みの下どの様にしたら良いか相談にみえた。弊法人が運営するカフェつむぎの小箱ボックスでの展開や、NET ショップの活用を紹介した。 5 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩無料相談会の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名）

	7日（水）スタッフミーティング ・はじめの一歩無料相談会の振り返り ・フリーペーパーまるまる2号制作打合せ （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 10日（土）コミュニティペーパー制作講座③（登米市） 　①センスのイイ　カメラ技法を学ぼう 　②時間10：00～12：00 （参加者数：事務局1名、講師1名、スタッフ2名、受講者6名　合計10名） （まとめ） 　受講者は子育て女性、会社員、高齢者の方々に参加していただいた。写真を見た相手に伝わる写真の撮り方の中で、記事にマッチする写真とは？何を伝えたいのか？構図の使い方等、即活用できる内容を説明いただいた。また、受講者それぞれが風景写真を撮り、カメラの撮影技術面やカメラの使用面でもご指導をいただいた。 10日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間14：00～16：00 （参加者数：事務局1名、参加者1名　合計2名） （まとめ） 　前回の講座に参加したが、現在定年退職して、写真を毎日撮り続けているが、発表の場がほしい。どうしたらよいのか分からないとの相談だった。また、写真を仕事に活かせることの相談も受けた。 13日（火）全体ミーティング ・登米市各種講座②の振り返り （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 14日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座②の振り返り （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 17日（土）コミュニティカフェ開設講座③登米市） 　①じぶんの思う居場所ってどんな場所 　②時間10：00～12：00 （参加者数：事務局1名、スタッフ2名、受講者5名　合計8名） （まとめ） 　受講者は子育て女性、会社員、高齢者の方々に参加していただいた。コミュニティカフェとしての居場所としてどんな形態のカフェが今現在営業し

	ているかを説明いただいた。また、サービス等、運営方法、資金面などの具体的なアドバイス頂いた。手持ちの施設にて、多額の資金をかけずにコミュニティカフェを開設する際の工夫やアイディアを学ぶ事が出来た。 17 日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施 ・時間 14：00～16：00 （参加者数：事務局 1 名、参加者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　30 歳代の男性が脱サラして登米市に U ターンし、実家の空いたスペースを改装して漫画カフェ開業したいとの相談を受けた。その際の資金面や活用できる補助制度などの相談を受けた。 19 日（月）全体ミーティング ・登米市各種講座③の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 21 日（水）スタッフミーティング ・登米市各種講座③の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 24 日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間 10：00～12：00 （参加者数：事務局 1 名、参加者 1 名　合計 2 名） （まとめ） 　60 歳代の女性、お菓子作りが好きで自宅で色々なお菓子を作っているが、実際に販売出来ないか相談にみえた。カフェ開業の計画を考えているようなので開業場所や、資金面の検討をした。 26 日（月）全体ミーティング ・はじめの一歩無料相談会の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） 27 日（火）フリーペーパーまるまる 2 号発刊 　南三陸町４５００戸へ各戸区長配布 28 日（水）スタッフミーティング ・はじめの一歩無料相談会の振り返り （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名） ３月 5 日（月）全体ミーティング ・報告会にむけての打合せ （参加者数：事務局 1 名、スタッフ 3 名　合計 4 名）

	7日（水）スタッフミーティング ・報告会に向けての打合せ ・フリーペーパーまるまる3号制作打合せ （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 10日（土）はじめの一歩無料相談会（登米市）実施 ・時間14：00～16：00 （参加者数：事務局1名、参加者1名　合計2名） （まとめ） 　40歳代の二人の女性が、子供達が野外で遊べる場所作りが出来ないか相談に見えた。現在栗原市などで行われている「森の幼稚園」活動の事例を含めて説明した。 12日（月）全体ミーティング ・報告会の進行・作業等の確認 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 14日（水）スタッフミーティング ・報告会の進行・作業等の確認 （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 15日（木）平成29年度NPO等の絆力を活かした震災復興支援事業報告会 17日（土）はじめの一歩無料相談会（南三陸）実施 ・時間14：00～16：00 （参加者数：事務局1名、参加者1名　合計2名） （まとめ） 　６０歳代の女性達で趣味のアクセサリーや編み物をしているが、販売及び発表の場所を探しているとのことで相談にみえた。BOXショップの開設や各地で開催しているマルシェへの出店等から取り組んではとアドバイスをした。 19日（月）全体ミーティング ・報告会の振り返り （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 21日（水）スタッフミーティング ・報告会の振り返り （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名） 26日（月）全体ミーティング ・今年度事業のまとめ （参加者数：事務局1名、スタッフ3名　合計4名）

	28 日（水）スタッフミーティング ・今年度事業のまとめ （参加者数：事務局１名、スタッフ３名　合計４名） 29 日（火）フリーペーパーまるまる３号発刊 　南三陸町４５００戸へ各戸区長配布
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 6,427,750 円 （国費 4,285,166 円、県費 1,494,834 円、実施主体 647,750 円） 【内訳】 人件費 3,748,974 円、委託費 518,400 円、諸謝金 290,000 円、 旅費 78,310 円、消耗品費 376,114 円、印刷製本費、300,000 円、通信運搬費 83,355 円、使用料及び会場借料、667,775 円、募集広告費 364,822 円
具体の成果	【直接的効果】 １昨年の講座実績も踏まえて、今年度コミュニティカフェが栗原市・気仙沼市・南三陸町・登米市の４か所で開設された。各地にて開設されたコミュニティカフェが、地域コミュニティの拠点や地域の居場所として機能し、多世代間の交流も生まれ始めている。 ２平成３０年度には南三陸町で新たにコミュニティカフェの開設が予定されている。また、南三陸町の社会福祉協議会が建設している福祉モール内でもコミュニティカフェが実施される予定であり、新しい地域コミュニティの拠点形成の一助となることが期待される。 ３コミュニティペーパー制作講座を受講した数名の自治会長達が自治会報を自ら発刊し地域コミュニティを繋ぐ役割を担い始めている。今後も自治会報が発刊されていくことにより、地域コミュニティの絆はより一層深まることが期待できる。 ４コミュニティペーパー制作講座の受講生を中心に南三陸町の商店街と地域住民を繋ぐフリーペーパーが発刊され、商店街の大きな課題である地元住民への誘客と地元住民が商店街を改めて見つめ直すきっかけとなった。 ５コミュニティビジネス開業講座の受講生の中から気仙沼市で２名、南三陸町で２名、登米市で１名の起業や第２創業者が生まれた。それぞれのビジネスプランはまだ磨き上げる必要はあるが、自立を果たし自らが復興に向けた行動に取り組む姿勢は大変評価できる。今後も並走しながら支援していくこととする。 ６コミュニティビジネス開業講座の受講生による、意見交換を主としたサー

クルが自主的に組織され、月に一度程度定例会を行うようになっている。今後それぞれの長所を結び合わせた取組による相乗効果が期待できる。

7はじめの一歩サポートセンターを開設したことにより、多くのご相談を受け付けることが出来た。相談者それぞれが復興に向けて何かを初めてみたいと思うニーズは確実に存在しており、小さな一歩であろうと心の復興を果たしていくためには必要な取組であることが改めて認識された。

【波及的効果】

1これまで数年にわたりコミュニティカフェ開設講座を実施して来たが、沿岸部各地や県北各地にて大変多くの地域の居場所が作られるようになった。これまでの地域の居場所は自治会の集会所等が主であり、コミュニティカフェの手法を元にした、新しい地域の居場所の存在は住民それぞれの心を繋ぐ役割が期待できる。また、住民主体の地域活性化にも大きな役割を担っていくことが各地で開設されているコミュニティカフェ（地域の居場所）を通じて確認できた。

2コミュニティペーパーが担う地域づくりの役割は、地域住民の自立を促す役割と、地域住民の自治意識の向上を図る効果が得られる事が認識された。自治会報紙を作るには、地域を取材する必要があり、特色ある記事を掲載するには地域住民の協力も必要となる。また、出来上がった会報紙を各住民に届けるにも多くの住民の協力が不可欠となる。この様に地域の力を総動員してこそ成し遂げることが出来るわけである。これから南三陸町では新しい自治会が誕生し、地域コミュニティが新たに形成される。その際多くの自治会がコミュニティペーパーを発刊させ、地域住民の絆を繋ぐツールとして活用いただくことが期待できる。

3ビジネスの手法を活用した地域課題解決策であるコミュニティビジネスについて、必要性やそれに伴う効果及び自ら実践する為の手法を理解する事が出来た。沿岸被災地では住環境の整備は概ね完了しつつあるが、いまだ多くの生活課題に直面している状況に変わりはない。多くの生活課題を行政等の力にばかり頼ることなく、住民同士が共助の取組をもって課題解決するためには、コミュニティビジネスの手法が効果的である。本講座を通じて新たに事業を始めた受講生が、これから沿岸地域の担い手となり、より多くの住民を巻き込んだ取組を行っていくことが期待できる。

4はじめの一歩サポートセンターを開設した事により、様々な悩みや課題（生活面・雇用・創業・居場所作り等）に対する多くの相談を受け付ける事が出来た。相談者の多くは何かを始めてみたいが、これまで相談窓口が存

	在せず自立した取り組みが進んでいなかったが、新たに相談窓口を開設したことにより、趣味のサークルやお茶飲み会等の地域コミュニティでの活動をスタートするきっかけとなった。
平成30年度以降の活動計画	今年度の事業を実施して改めて南三陸町には身近なところに大きな課題（南三陸町商店街と地元住民との希薄な関係性、災害公営住宅住民の普段の買い物難民化、地元住民が参加する商店街の活性化等）が存在することが改めて確認出来た。よって今後は、課題解決に向けた以下の取組を地域住民及び商店街と一体となって実施していくこととする。 ・今年度から発刊した、南三陸町商店街と地域住民を繋ぐフリーペーパーまるまるの継続的な発刊を通じた、商店街と住民の絆の醸成及び地域住民への各種情報提供。 ・商店街の賑わいづくりの為の住民主催の各種手作りイベントの実施。 ・商店街を会場にした子供達の生涯学習の機会（こども商店街等）の提供。 ・本事業の取組を通じた地元担い手の育成。 ・商店街・自治会・行政の協働を進める組織の立ち上げ。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が８割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業によりNPO等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は２団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－９
事業名	NPO・小中高校・行政と連携した南三陸町の復興人材育成事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人キッズドア 【参画した団体（ＮＰＯ等以外）】志津川中学校、志津川高校、南三陸町
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	南三陸町の小学校から高校までの学校外教育を含む総合的な教育環境を、学校関係者、行政、NPO、その他町内外の様々なリソースと連携して充実させる。小学校から高校までの教育支援が充実し「南三陸町にいても充実した教育機会が得られる」という状況を作り、南三陸町の将来を担う復興人材を育成する。
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 5,573,722 円 （国費 3,715,814 円、県費 1,300,186 円、実施主体 557,722 円） 【内訳】 人件費 3,137,549 円、諸謝金 168,564 円、旅費 1,080,520 円、消耗品費 362,935 円、通信運搬費 249,172 円、使用料及び会場賃料 174,550、委託費 400,432 円
具体の成果	＜課題・事業の必要性＞ 震災から 7 年がたち、現在も多くの生徒がスクールバスで通学をしており、本年度もこの状況が変わることはない。さらに、学習支援を行うためには専門的なスキルが必要となるため、町内で人材を確保することは困難な状況にある。そのため、本事業の継続は学校側からも強く求められ、必要とされている ＜直接的な効果＞ ・志津川中学校放課後学習会の実施回数２２回、延べ参加人数６８１人 ・中学 3 年生向け出張学習会の実施回数１０回、延べ参加人数１６８人 ・高校生向けキャリア教育ワークショップ参加人数２０名 ・中学生向け課題解決ワークショップ参加人数１５名

＜波及的効果（アウトカム）＞

・志津川中学校 3 年生の全員の高校進学→１００％達成

・志津川高校からの大学等への進学希望者の増加→１５０％達成

・基礎学力向上→弊会作成基礎学力テストの点数平均１２点向上

英語

単元	前	後
be動詞・一般動詞（現在）	63%	**86%**
be動詞・一般動詞（過去）	44%	**57%**
疑問詞	36%	36%
進行形、未来を表す表現	39%	**58%**
助動詞	68%	63%
動名詞	89%	78%
to不定詞	49%	**57%**

数学

単元	前	後
正負の数	51%	**78%**
文字の計算	56%	**86%**
一次方程式	51%	**74%**
根号の計算	45%	**75%**
展開、因数分解	31%	**57%**
資料の整理	34%	**50%**
確立	30%	**43%**

平成 30 年度以降の活動計画

東日本大震災から 8 年目を迎え、被災地の課題も刻々と変化してきている。今後も小中高、行政との対話を重ね、ニーズを把握した上で支援のあり方を検討していきたい。

評価

（上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）

被災地の復興・被災者支援に関して、

☐Ａ：特に優れた成果が得られた

☐Ｂ：優れた成果が得られた

☑Ｃ：一定の成果が得られた

☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた

☐Ｅ：成果が得られなかった

NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合は約７割であった。

また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった NPO 等はないが、学校や自治体の参画があり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果

（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－１０
事業名	住民主体の復興の町づくりに向けた市民活動ネットワーク「はまのわネット（事業実施時は「きずなネット」に改名）」支援事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人レスキューストックヤード 【参画した団体（ＮＰＯ等）】一般社団法人復興みなさん会、特定非営利活動法人浜わらす（きずなネット団体はじめツアー参加者の受け入れ、団体・活動の紹介、七ヶ浜町民との交流）、社会福祉法人七ヶ浜町社会福祉協議会（きずなネット会議への参加、きずなネット活動への協力）
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	町づくりや復興に向け、七ヶ浜町で活動を行っている団体同士の繋がりの場「きずなネット」の立ち上げや、活動支援を実施した。 ９月 7 日：第１回「きずなネット」会議 ９月 17 日：「きずなネットまつり」（活動サポート①） ９月 30 日：「第１回きずなハウスをみどりでいっぱいにしようプロジェクト（寄せ植え）」（活動サポート②） 10 月 7 日：「親子防災ワークショップ」（活動サポート③） 10 月 15 日：「第２回きずなハウスをみどりでいっぱいにしようプロジェクト（苗木植え）」（活動サポート④） 10 月 22 日：東北３県の市民活動団体視察①　南三陸「被災地学習・交流バスツアー」 11 月 11 日：松ヶ浜花の和（協力：向洋中Ｆプロ）「松ヶ浜地区避難所花壇づくり」（活動サポート⑤） 11 月 11 日：「第３回きずなハウスをみどりでいっぱいにしようプロジェクト（畑作り）」（活動サポート⑥） 11 月 14 日：第２回「きずなネット」会議 11 月 16 日：ななはまっこ「ちびはまっこプレーパーク①」（活動サポート⑦） 11 月 23～26 日：マザーファーム「産直野菜販売」（活動サポート⑧） 12 月 1 日：七ヶ浜町ボランティア友の会「定例会」（活動サポート⑨） 12 月 13 日：松ヶ浜の和「大人カフェ＆松ヶ浜フェア」（活動サポート⑩） 12 月 14 日：ななはまっこ「ちびはまっこプレーパーク②」（活動サポート⑪）

	12 月 28 日：向洋中学校Ｆプロジェクト「Ｆプロ活動報告会」（活動サポート⑫） １月 17 日：おりおり「糸紡ぎワークショップ①」（活動サポート⑬） １月 21 日：きずな工房「ミシン教室」（活動サポート⑭） １月 31 日：おりおり「糸紡ぎワークショップ②」（活動サポート⑮） ２月６日：第３回「きずなネット」会議 ３月４日：おりおり、きずな工房「フラッグ作りワークショップ」（活動サポート⑯） ３月 10 日：はまのわ「Bookcafe＆写真集お披露目会」（活動サポート⑰） ３月 18 日：東北３県の市民活動団体視察②　気仙沼「被災地学習・交流バスツアー」
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 2,580,367 円 （国費 1,720,244 円、県費 601,756 円、実施主体 258,367 円） 【内訳】 人件費 1,520,180 円、諸謝金 100,916 円、旅費 375,218 円、消耗品費 93,691 円、通信運搬費 41,268 円、使用料 26,906 円、募集広告費 204,464 円、委託費 200,296 円、その他 17,428 円
具体の成果	【アウトプット】 ・「きずなネット」の立ち上げ、８団体参加 ・「きずなネット」会議の開催３回（計 47 名参加） ・被災地学習・交流ツアーの催行２回（計 86 名参加） ・きずなネット活動サポート企画の実施 18 回（計 390 名参加） 【アウトカム】 　東日本大震災以後、町づくりや復興に向け活動したいと思う住民がいる一方、その活動を支援する機関や活動の場がなく、住民一人ひとりの持つ力を活かすためには「場と繋がり」づくりが必要であった。 　この度、主に七ヶ浜町住民からなる「きずなネット」の設立を支援し、本事業を実施したことにより、町のために役立ちたいと考える住民の自発性・主体性が高まり、新しい市民団体の立ち上げや、団体同士のネットワーク化が促進されることとなった。また、「きずなネット」は、災害公営住宅のコミュニティ形成、ボランティア活動、防災対策、自然体験、物作り等、誰もが参加しやすい新たな社会活動の場を地域に生み出している。

平成30年度以降の活動計画	市民活動のさらなる活性化、定着化を目指して、「きずなハウス」が町民のニーズとシーズをつなぐ市民活動センター的役割を担う。また、「きずなネット」が町民の集いの場づくりや地域防災の推進役等となっていくよう、拠点整備、広報、先災地のNPO等との交流を実施し、団体の活動サポートを継続していく。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業によりNPO等が主体となった復興･被災者支援の実施に関わった団体数は３団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－１１
事業名	南三陸町における高校生の主体的な地域活動を促進する環境づくり事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】認定特定非営利活動法人底上げ 【参画した団体（ＮＰＯ等)】特定非営利活動法人キッズドア 【参画した団体（ＮＰＯ等以外)】宮城県立志津川高等学校
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【事業概要】 本事業は、高校生を対象とした①週 2 回程度放課後のフリースペースでなんでも話せる環境づくりを行い、②月 1 回程度底上げ Drinks で広く参加者を募り、地域住民との食事交流会を行う。会の前半では地域のことに目を向けてもらえるようなきっかけづくりを行い、同時に、地域の方にも高校生の地域活動を知ってもらえる場を設計する。③月に 1 回以上の高校生の地域活動のサポートを行い、フィールドワークや自分たちのプロジェクトの相談や立案の補助をする。また、デザイナーとともに町についての制作物を一つ作り、地域の方への報告を行う。④週に 2 回志津川高校の自然科学部も同様に、科学の視点で町の魅力を発信するプロジェクトのサポートを行い、町のイベントで 3 回以上のブース出展、デザイナーとともに制作物の発行などを行う。⑤月に 2 回、地域活動を通し、進学、就職した OBOG に対しても引き続き町に関われるようなサポート体制を構築する。①②③④⑤の活動を通して、町での成功体験や達成感を味わい、高校生の地域への愛着や自己肯定感の向上を図ることとともに、地域に目を向けられる若者を増やし、彼らがポジティブな気持ちで地域に帰ってこれるような環境を構築する。 【事業内容】 ①放課後フリースペース（週２回程度） 南三陸町には高校生が放課後に集まれる場所がない。そのため、放課後に行き場がなく、家と学校の往復になっている生徒がほとんどである。学校でも家でもないサードプレイスとして、放課後、学校近くのカフェや、校内に設置されている町営塾の一角でフリースペースを実施する。そこでは、特にこちらから「あれをしなさい」と指示するのではなく、高校生に自由に過ごしてもらう。これまで実施してきた傾向では、学校の宿題をやる子や、読書をする子、みんなで話している子など様々だ。この場においての私たちの役

	割は、参加している子のカウンセリングやメンタリングである。元気そうではいるけれど精神的に不安定な子もいれば、家庭環境があまり良くなく、学校でも教員とうまく付き合えない子もいる。そういった子たちに対し、カウンセリングやメンタリングの手法で接することでストレスの軽減を図る。災害と子どもの社会参画の研究をしている工学院大学助教授の安部芳絵氏に子ども対応のアドバイザーとして入っていただく。スタッフとの打ち合わせを東京にて行い、状況を説明することで子どもとの関わり方のフィードバックを頂き、心のケアにつなげる。お互いが否定されずに話すことができる空間作りによって、自分の思いを素直に表現できる信頼関係を構築していく。新規高校生の参加を促していく。1回平均5名～10名ほど。 ②底上げDrinks（月1回程度） 　事業の必要性で記している通り、南三陸の高校生は地元の大人との接点が少ない。また、高校生に「ワークショップをやる」というと参加のハードルが高く感じてしまう傾向がある。そのため、地元の大人と食事をとりながらの交流する機会を作る。高校生が地元にいる大人と交流することで、地域活動の協力者を集めたり、様々なキャリア人材に触れることで多様性を身につける。毎回ゲストスピーカーや企画を通して、学びの時間を設ける。機会に応じて、高校自身の活動の発表の時間を設け、周りの高校生や大人の前でプレゼンをする機会を通して自己の思いの言語化を図っていく。参加者は平均30名ほど。 ③高校生の地域活動サポート（月1回以上） ①で信頼関係を構築し、②で地元の人と触れ合う。①②を通し、高校生たちは「私たちも地域のために何かしたい」と思いが強まる。それを実際に行動に移す場が③である。主にスタッフは、ワークショップの設計と高校生のメンターの役割をする。初めは、高校生が自分たちの地域を知るためにフィールドワークや、町について考えるワークショップを行う。そこから実際に自分たちの町のために何ができるか地域課題を解決していくプロジェクトを計画、立案、実践を行う。 ④志津川高校自然科学部の地域活動サポート（週2回） 　昨年から、志津川高校の自然科学部が地域の企業と共同でプロジェクトを行っており、このプロジェクトの企業と学校、高校生のコーディネートを当団体が行っている。プロジェクトの内容は、南三陸町ではバイオマス産業都

	市構想の一環で生ゴミのバイオマス発電を行っている。家庭にて発電に適した生ゴミを分別し、それを町で回収しているが、回収率が町内で30%ほどとあまり良くないため、高校生が自分たちのアイディアで啓蒙活動を行っている。昨年はイベントの参加やチラシの作成、ウェブサイトの作成などを行った（ http://www.guruguru-bio.com/ ）今年度は、7月、9月、12月の町内のイベントにブース出展し、活動報告と啓蒙活動を行う。8月には仙台で行われる循環型のまちづくりのイベントに参加する。1月にはインプットとして東京から講師をお呼びし講話の機会を設ける。（講師は高校生の学びたいことに応じてスタッフの人脈より人選）啓蒙活動がより促進するようにプロのデザイナーとともに共同で制作活動を行う。講師、デザイナーともに事前にスタッフと打ち合わせが必要なので、スタッフが東京に行き両者と打ち合わせを行う。 ⑤高校生団体OBOGの面談、地域活動サポート（月2回） 　現在、高校を卒業した高校生団体OBOGが、仙台の大学に通っている。実施的な距離がある為、地域の状況把握や活動の機会をつかむ事が難しく、もやもやしていると連絡を受けている。遠く離れている場所からどんな地域活動ができるのか寄り添う必要がある。そこで、スタッフが月に2回OBOGたちと面談や活動のサポートを行い、継続的に地域について考えられる機会を提供する。長期休みの時に大学生が帰省するタイミングで、地域でのプロジェクトを行う。また、大学生自身に高校生へと働きかける地域活動を企画してもらい、実施する。例として、高校生に対する町歩きプログラムや、市内で働いている20代を集めての高校生との交流会、話し合いのワークショップ形式で思いを引き出すなどのプログラムを予定している。自ら高校生へのプログラムを実施してもらうことで、地元に帰り、そこで主体的に行動し達成感を得ることができる体験を通して、主体性と郷土愛の育成を図る。 【スケジュール】 通年①放課後フリースペース（週2回程度） 　②底上げDrinks（月1回程度） 　③高校生の地域活動サポート（月1回） 　④志津川高校自然科学部の地域活動サポート（週2回） 　⑤高校生団体OBOGの面談、地域活動サポート（月2回）

	＜6 月＞①、②町の人の講話、③まちあるき、④科学研究発表会、⑤プロジェクト相談 ＜7 月＞①、②町についてのワークショップ、③プロジェクト相談、④町内イベント参加、⑤プロジェクト相談 ＜8 月＞①、②フリートーク、③町内イベント参加、④仙台イベント参加、⑤プロジェクト立案 ＜9 月＞①、②高校生報告会、④町内イベントブース出展、⑤プロジェクト実行 ＜10 月＞①、②町の人の講話、③将来についてのワークショップ、④デザイナーと制作物の打ち合わせ、⑤プロジェクト振り返り ＜11 月＞①、③町についてのワークショップ、④制作物作成、⑤プロジェクト相談 ＜12 月＞①、②フリートーク、③仙台イベント参加、④町内イベントブース出展、⑤プロジェクト相談 ＜1 月＞①、④講師講話、⑤プロジェクト立案 ＜2 月＞①、②高校生成果発表、④町内イベントブース出展、⑤プロジェクト実行 ＜3 月＞①、③振り返り、④振り返り、⑤振り返り
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 6,314,783 円 （国費 4,064,000 円、県費 0 円、実施主体 2,250,783 円） 【内訳】 人件費 4,950,000 円、諸謝金 80,000 円、旅費 297,535 円、消耗品費 25,210 円、印刷製本費 74,958 円、通信運搬費 174,183 円、使用料及び会場賃料 712,897 円、
具体の成果	【背景要約】 震災から 7 年が過ぎる南三陸町は、明るいニュースもあるが若者の存在が置き去りにされていることもある。例えば、バス停の位置の変更により若者の交通手段は不便になってしまった。震災後から、復興に町の若者の声が反映されていない状況がある。 2017 年 1 月に当団体が志津川高校生にとったアンケートでは復興には関わりたいと思っているが、自分の意見は町にいい影響を与えないと無力感を感じている子が多いことがわかった。また、地域に相談できる大人がいることで自己肯定感や自己効力感、町に対しての愛着などが高いことがわかり、地域の大人との接点が高校生の内面にいい影響を与えていることがわかっ

	た。また、昨年志津川高校内で学習支援を実施し、今年度の学習センターの設置に一定寄与する事が出来た。一方で開設時にセンター内のカリキュラムとして地域教育を実施する事がなく、高校生が地域と接点を持ち地域に何か取り組みを実施する為の機会提供は引き続き校外及び学校と連携して実施していく必要がある。これらの状況から、高校と連携しつつ、高校生自身の内面の自己効力感、町に対しての愛着や意識に対してのアプローチが必要だと考えられる。 【事業成果（効果）】 ＜アウトプット＞ ①放課後フリースペース（週２回） ・延べ 300 名以上の参加者　→　158 名の参加 申請時は延べ 300 人の参加を見込んでいたが、実際は 158 名の参加にとどまった。理由は、会場としていたカフェが混雑するようになったため、高校生と落ち着いて話をする環境ではなく、信頼関係が築きにくくなっていたからである。フリースペースとしての実績は 158 名だが、週に 2 回は違うカフェで高校生の相談にのったり、町営塾のロビーで高校生と関わりを持てていたので、高校生の顔が見えるようになるという当初の目的に沿う形で活動ができていた。 ②底上げ Drinks（月 1 回程度） ・延べ 300 名以上の参加者　→　111 名の参加 申請時は延べ 300 人の参加を見込んでいたが、実際は 111 名の参加にとどまった。実施にあたって高校生の都合がつかなくなったこともあり毎回参加者が伸び悩んだことやテストなどにより何度か中止にしたことが原因であると考えられる。また、内容に関しては、地域の大人と一緒にワークショップを行い、高校生の町に対する声や意見を聞く場を設けたことで、高校生に対する地域の大人の理解も深まった。別の回には、地域の大人の講演会なども実施できたので高校生の得るものが大きかったように思う。一方で、ワークショップや講演などにしてしまうと高校生の参加ハードルが上がってしまうので、年間通してバランスをとりながら実施していきたい。 ③高校生の地域活動サポート（月 1 回） ・2 つのプロジェクトが計画、実行　→　計 3 回のイベント実施

	3つの地域の高校生の活動が実施された。一つは、高校生が地域食材を発信したいという想いから音楽イベントに出店し、地域のお米とシャケを使った混ぜご飯を来場者約2000名に振舞った。この活動を通して高校生自身も地域の食材を通して生産者との関係が作ることができた。もう一つは、進路で自己内省をした3年生が高校生はなかなか自分を省みる時間がないという課題感から、現役の高校生に対して自分の過去と未来を考えるワークショップを3回実施した。参加者は3回合わせて60名以上になった。 ④志津川高校自然科学部の地域活動サポート（週2回） ・ゴミ分別の啓蒙活動により回収量が昨年度より10%上がる　→　測定不可 ・地域の催しに3回以上ブース出展　→　4回のブース出展 ・1種類のリーフレットの作成、発行　→　1種類の干潟調査の図鑑の発行 申請時は昨年度から行なっている生ゴミ分別についての申請だったが、今年度は町の干潟調査と発信の取り組みも新しく行った。7月までに干潟の調査と種の同定作業を行い、8月からは干潟と生ゴミ分別の2つの発信を行った。合計4回のブース出展を行い、4度合わせて3000名以上に町の取り組みを発信することができた。また、年度末には親子で干潟に触れてもらえるような干潟の図鑑を2000部発行し、町内の全学校に配布する手続きを行った。配布は2018年4月に実施する。来年度は川の調査にも活動の幅を広げて引き続き調査をする予定。 ⑤高校生団体OBOGの面談、地域活動サポート（月2回） ・1つのプロジェクトが計画実行される　→　3つのプロジェクトの実施 高校生団体のOBOGのプロジェクトを3つ実施することができた。一つは震災後中止されていた夏祭りのトコヤッサイコンテストという踊りのコンテストを復活させ、南三陸出身大学生が企画運営を行った。夏祭りの来場者は1000人以上になり、コンテストの参加者は300人をこえた。2つ目は外から来る人に南三陸の食材を味わってほしいという想いから町内のイベントで町の食材を使ってスイーツを作り販売した。上記の高校生の地域活動とは別のプロジェクトで出店した。3つ目は現役の高校3年生たちに仙台に行ってからやりたいことなどを明確にしてほしいという想いから進学後のことを考えるワークショップ合宿の企画運営を行った。参加者は合計7名で、進学後やりたいことなどを深く考える時間を

	もてた。 ＜アウトカム＞ フリースペースやDrinks事業を通して多くの高校生の接点や居場所ができた。また、自然科学部や高校生団体では高校生独自のプロジェクトが立ち上がり、地域の方々に高校生が意欲的に活動する姿を見せることができたため、高校生を応援しようという気運が高まった。また、高校生団体のOBOGが現役生をサポートする体制ができつつある。
平成30年度以降の活動計画	今後は、引き続き高校生が地域のことを考え、地域の方と繋がれるような機会の提供ができたらと思っている。また、今年度の活動を通して自団体だけで高校生のサポートと地域の方とのコーディネートをするのは難しく感じたため、地域の方を巻き込み、高校生をサポートする大人のコミュニティを作る必要があると感じた。 今後も高校生の地域活動を定着させるために、団体のノウハウをまとめて地域にスケールアウトしたり、高校生が地域のことに関心を向けられる教育教材が必要であると感じた。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合は約７割であった。 また、NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業によりNPO等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わったNPO等は１団体であったが、学校の参画があり、取組の波及・継続に資するものであった。

２－２．各事業の成果
（1）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

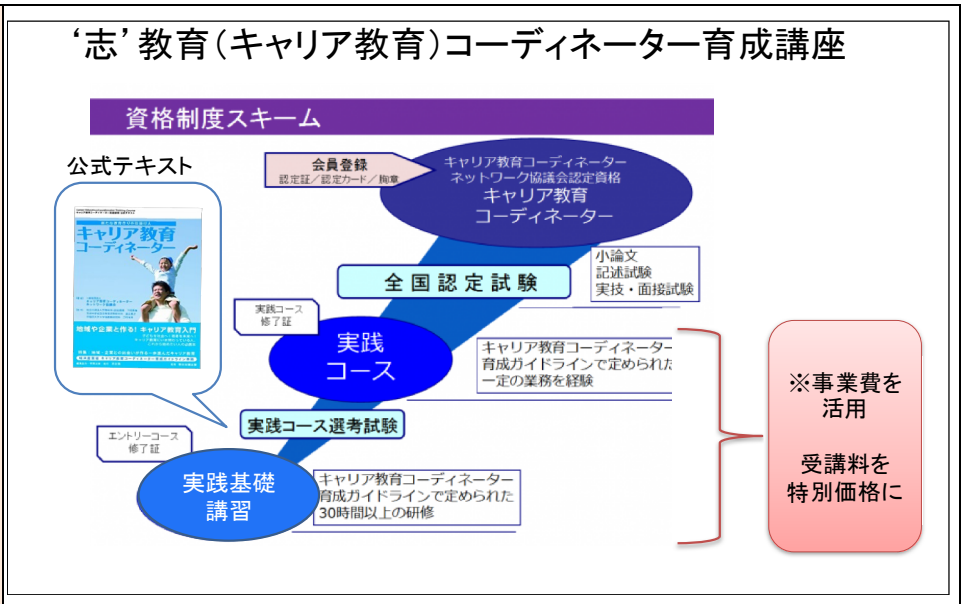
整理番号	（１）－１２
事業名	被災地・地域活動団体ガイドブック 2018 作成事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】特定非営利活動法人地星社 【参画した団体（ＮＰＯ等）】特定非営利活動法人いしのまき NPO センター（ガイドブックの広報協力） 【参画した団体（ＮＰＯ等以外）】宮城県サポートセンター支援事務所（セミナーの実施協力）、とめ市民活動プラザ（ガイドブックの広報協力）
実施期間	平成２９年７月１日から平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【事業概要】 ①『被災地・地域活動団体ガイドブック 2018』の作成と配布 団体情報の収集と組織運営課題アンケートの実施、地域づくり事例・連携事例の取材を行い、その内容を「被災地・地域活動団体ガイドブック」として冊子にまとめた。そうした活動とともに説明会の開催と関係機関の訪問を行った。冊子の完成後には報告会を開催し、関係機関に冊子の配布を行った。 ②事業計画・事業評価講座の開催 地域活動団体を対象に、事業評価に関する講座を仙台と石巻で開催した。 【スケジュール】 ７月　冊子および講座の企画案作成。団体、事例についての情報収集。関係者打合せ。 ８月　団体、事例についての情報収集。関係者打合せ。ライターとの打合せ。 ９月　団体、事例についての情報収集。デザイナーとの打合せ。事例の取材 2 件、記事の作成。 10 月　団体、事例についての情報収集。事例の取材、記事の作成。 11 月　団体、事例についての情報収集。事例の取材、記事の作成。報告会の開催。 12 月　団体、事例についての情報収集。事例の記事の作成。 １月　団体情報募集。組織運営課題アンケートの実施。団体情報の確認、整理。原稿の作成。 ２月　団体情報募集。組織運営課題アンケートの実施。団体情報の確認、整理。原稿の作成。講座の開催。 ３月　校正・入稿。冊子の完成、配布。報告会・説明会の開催。

事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 3,218,666 円 （国費 2,145,777 円、県費 750,223 円、実施主体 322,666 円） 【内訳】 人件費 1,607,800 円、諸謝金 309,000 円、旅費 167,832 円、消耗品費 158,487 円、印刷製本費 686,000 円、通信運搬費 225,527 円、使用料および会場賃料 34,020 円、委託費 30,000 円
具体の成果	【課題・事業の必要性】 ◯復興支援に取り組む団体側の課題と背景 被災地の課題が複雑・多様化する中、自団体だけで課題を解決しようとするのではなく、さまざまな主体との連携において課題に取り組むこと、課題の当事者自身を支援者側にしていくことである。こうした連携を推進するのに地域活動団体ガイドブックがツールとして役立つ。 ◯地域側の課題と背景 多くの被災者が復興公営住宅への入居や集団移転を果たし、住まいの復興は進んだが、新しいコミュニティづくりはまだまだこれからであり、地域の課題解決力の強化が必要である。その際に、地域にどのような団体が活動しているかの情報が有用である。 【事業成果（効果）】 ＜直接的効果＞ ガイドブックを利用している団体からは、「気になる団体の活動内容や連絡先の情報集めに利用している」（教育系 NPO）、「連携先を探して声をかける」（仙台の任意団体）などの声を伺った。 また、中間支援団体であるせんだい・みやぎ NPO センター、みやぎ連携復興センターのスタッフからは、企業などから、ボランティア先や支援先団体の照会があったときに利用しているとのことだった。 行政関係者（仙台市市民協働推進課等）、県外の助成機関（日本 NPO センター、市民社会創造ファンド、ベネッセ子ども基金、ヤフー基金等）の関係者からは、被災地の現地でどのような団体が活動しているのか、情報収集に利用しているとのことだった。 地元マスコミ（NHK 仙台放送局、FM 仙台）で被災地の団体を取材したり、番組で取り上げている方からは、取材先の情報収集に利用しているとのことだった。 このように、ガイドブックの利用者からは概ね好意的な評価をいただいた。

	事業評価のセミナーは、アンケートでも参加者から好意的な評価が多く、事業の振り返りや今後の事業立案に生かされると思われる。 ＜波及的効果＞ 新しいガイドブックが活用されるのは今後のことになるが、それぞれの団体ができることと必要とされる支援や協力を書く項目をつくったことで、より連携をしやすくするための情報発信ができた。また、こうした情報を被災地を網羅して行っていることで、セクター全体としての信頼性を高めることにつながっている。 ◯見込まれる成果についての達成状況 以上のようなことから、団体同士やさまざまな主体との連携促進のきっかけづくり、行政機関やマスコミへのガイドブック配布によるボランティア先としての紹介や、マスコミ掲載・出演につながる情報提供ということでは、十分成果を挙げたと考える。今後は、当法人でも連携の場をつくっていきたい。 また、セミナーについても各団体の事業のふりかえりと今後の事業立案に役立ったと考える。
平成 30 年度以降の活動計画	被災地で活動する団体同士や、団体と企業などとの連携促進の場作り。地域活動団体ガイドブックの内容を年報化し、被災地の課題をわかりやすく示す。支援団体だけでなく企業や行政の情報も掲載する。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興・被災者支援の実施に関わった団体数は１団体であり、今後、他団体の参画及び取組の波及・継続が期待される。

２－２．各事業の成果
（１）ＮＰＯ等の絆力を活かした復興・被災者支援の取組支援

整理番号	（１）－１３
事業名	子供たちに社会で生きる力を！「‘志’教育コーディネーター育成」事業
取組実施主体と役割分担	【事業実施主体】 特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク 【協力・連携団体等】 ●講座運営・講師協力 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク、一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会、特定非営利活動法人Synapse40、特定非営利活動法人みらいず works、認定特定非営利活動法人地星社、宮城県東部地方振興事務所　他 ●情報提供・広報協力 一般社団法人 Ishinomaki2.0、一般社団法人プロジェクト結コンソーシアム ●実践コースヒアリング・体験先 株式会社宮富士工業、湊水産株式会社、石巻市内高校２校、石巻市立中学校１校、石巻市立小学校４校、登米市教育委員会、登米市立中学校２校大崎市立小学校１校、名取市立小学校１校、柴田町立中学校１校、仙台市立中学校１校、仙台市立小学校３校、栗原市立中学校１校、名取市高舘公民館　他
実施期間	平成２９年７月１日～平成３０年３月３１日
事業内容とスケジュール	【‘志’教育コーディネーター育成講座】 （一社）キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会のガイドラインに準拠・実践コース修了後、認定資格受験資格取得） ●開催場所 金曜日：仙台会場 トークネットホール 土曜日：石巻会場 川の上百俵館 ●定員 各会場２０名 受講申込３９名 （申込 43 名、キャンセル 2 名 途中参加 2 名） ●受講料 10,000 円 （資料代、テキスト代）



●講座内容

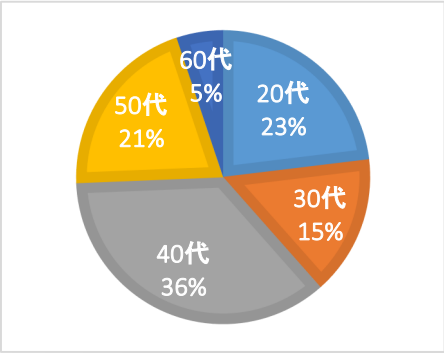
実践基礎講習（３３時間）　受講者数３９名（うち３８名修了）				
回 時間	日にち	仙台 会場	石巻 会場	内　容
第１回 ７時間	10/20 10/21	23 名	14 名	キャリア教育とは、学校の現状と課題 教員から情報提供、座談会
自宅学習　２時間				e-learning　(DVD を視聴して学習) キャリア教育に関わる取り組み
第２回 ７時間	11/3 11/4	20 名	14 名	キャリア教育コーディネーターの役割と業務 地域・企業等のキャリア教育支援 教育行政に関わる組織と現状 キャリア教育で育む力 学習指導要領
自宅学習　３時間				キャリ教育プログラムの開発 地域のキャリア教育事例調べ
第３回 ７時間	12/8 12/9	19 名	17 名	地域資源の理解とネットワーク構築 プログラム開発 各教科等との関わり
第４回	12/15 12/16	19 名	17 名	プログラム開発 効果測定

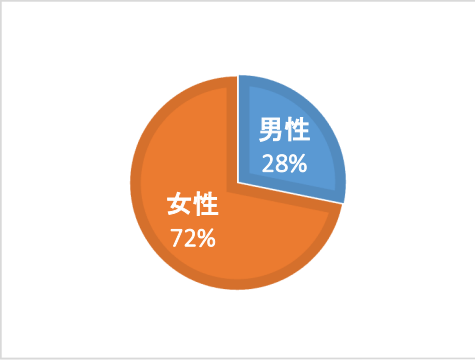
				先輩キャリア教育コーディネーターより実践事例紹介	
実践コース（約２ヶ月間）　受講者数３３名（うち２８名修了）					
集合 研修１	1/19 1/20	20 名	13 名	実践コースに向けて個人面接 ガイダンス チーム編成 キャリア教育プログラム体験	
現場実習期間 随時必要に応じて				チームまたは個人で各自現場実習 ※協力先は実施主体と役割分担に記載 キャリア教育コーディネーターとして一連の業務（１１項目+学校や企業と関係構築）を体験する。	
集合 研修２	3/9 3/10	19 名	8 名	現場実習ふりかえり キャリア教育に必要なこととは？ 先輩キャリア教育コーディネーターより実践事例紹介、 団体設立について	

●NPO マネジメント研修

日時	場所	対象	内容
3/12 14:00-16:00	カフェ蓮 フリースペース	受講生 3 名 （登米市）	コーディネーターが集まり任意団体設立に向けての研修の実施

●受講者情報





	【属性】 ・企業経営者　・起業支援家　・保育園長 ・教員 ・退職教員 ・行政職員 ・社会教育指導員 ・協働教育コーディネーター ・スクールソーシャルワーカー ・ビジネスコーチ ・飼育員 ・事務職員 ・地域団体スタッフ ・NPO 代表、スタッフ ・学生　・専業主婦
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 5,149,005 円 （国費 3,432,670 円、県費 407,330 円、実施主体 1,309,005 円） 【内訳】 人件費 2,648,968 円、諸謝金 777,860 円、旅費 619,366 円、消耗品費 469,393 円、印刷製本費 204,624 円、通信運搬費 21,500 円、使用料及び会場借 136,970 円、委託費 270,324 円
具体の成果	【課題・事業の必要性】 　全ての課題の解決方法は「教育」にあると考える。‘志’教育の視点で子供たちの生きる力を育み、関わる大人の「絆力」を高める。 ・子供たちや地域が抱える課題 　震災から７年が経過し、学校教育現場では被災した児童や生徒は、教員の異動や転校などで徐々に「見えにくく」なっていて、子供の課題が多様化している中で支援の難しさも出てきている。そして昨今、地域で教育を受けた生徒や若者が地元を離れ人口流出に繋がっている。さらに日本の子供たちの自己肯定感の低下には親子間での愛着形成の課題が問題視されている。その根本的な解決方法として、全ての子供たちが受ける公教育の中で、多様な体験活動と多様な大人との出会いを生む豊かな学びの場の創出が求められている。 ・コーディネーターの必要性と取り巻く課題 　学校教育現場では教員の多忙化、子供の問題の多様化等から豊かな学びの創出には、「コーディネーター」の存在が欠かせない。震災後、復興予算で県内の全自治体に社会教育主事が派遣され、各自治体で協働教育プラットフォーム事業が展開され、役割の一つとしてコーディネーターの発掘・育成を担ってきた。実際、学校と関わる最低限の知識やノウハウ、スキルもなく、個人のネットワークに期待し、学校と近い「顔の見える関係」にある方がコーディネーターとなるケースが非常に多い。震災から７年、自治体によってかなりの温度差が生じており、被災沿岸部以外は派遣社会教育主事も撤退

	し、その役を行政職員に担うこととなっており、実質機能不全に陥っている市町も見受けられる。教育事務所や教育委員会主催の限られたコーディネーター対象の研修会では、大枠しか知ることができずとても各地域の課題を解決するためのノウハウ、スキルアップ、ネットワーク化には至らない。 　反面、教育委員会の主導の下、コーディネーターの発掘・育成が進み、学校や地域と信頼関係を構築し、連携・協働で様々な実績を積み重ね「仕組みづくり」を行えている自治体もある。しかしながら、やればやる程、コーディネーターは専門職であるという認識と共に自己成長の機会のなさと子供たちの成長や変容を感じつつも身分保障の少ない勤務実態や周囲の理解不足にジレンマを感じ、せっかく育ったコーディネーターの意欲低下と離職危機を迎えているのが実態である。 　これから益々、地域全体で子供たちを育てる必要性が高まっていく。宮城県の方針として、ようやく全学校に「地域連携担当者」を置き、校内コーディネーターの役割を明確にした。各自治体で予算措置を行い、学校と地域が協働で子供たちを育てる「地域学校協働活動」を推進する推進委員と統括コーディネーターという役割が求められてくる。沿岸部では、なかなかコーディネーターの発掘・育成が進まないばかりか担い手もいない背景があり、当団体が関わる石巻市内の小・中・高校からは「学校に関わるコーディネーター」が欲しいという声、多様な支援ニーズが多数寄せられている。一方でやる気のあるコーディネーターや、コーディネーター役を担いたいNPOや役割の方々から学ぶ場を作って欲しいという要望もある。 【事業成果（効果）】 　直接的な効果（アウトプット） ① 実践力のあるコーディネーターを多数輩出できそうである。 （実践コース修了28名、6月認定試験受験予定約20名） 実践基礎講習受講生39名が、キャリア教育について正しい知識を得た。 受講生一人一人のキャリア形成や教育に対する意識が変わった。 ② 受講生同士のネットワーク化が図られた。 地域や属性を越えて、それぞれにつながりが強くなった。 ③ 地域レベルでの組織化が図られることで、コーディネーターの安定した職業化に向けた動きが取りやすくなる。 →登米地域で受講生が集まり団体設立。

	波及的効果（アウトカム） ① 教員、子供たちの心のケアにつながる。 ※コーディネーターは時に多忙で孤軍奮闘する先生方の「グチ聞き役、悩み相談役」となる。また、教員でも保護者でもない大人が授業で子供たちと関わることで「ナナメの関係性」が構築され、子供が抱える課題に対応することができる。 ② コーディネーターが作り出す子供の豊かな学びの場が増える。 ※コーディネーター１名につき影響を与える子供・地域住民平均６１０名で計算　６１０名×３９名＝２３，７９０名 被災地で学ぶ子供たち、被災経験をした子供たちが、多様な体験や出会いのある豊かな授業を通して将来への夢や希望を持ち、地元への愛着と誇りが持てる。 ③ 子供たちが、将来、自立した大人になること、社会で生きる力をつけること、そして地域社会への貢献意識を醸成できる。 ④ 地域の大人が子供たちと接することで、生きがいを感じる。 ⑤ 教員と信頼関係が構築され、学校からの依頼が増える。 ⑥ 思いの共有できる大人が集まり、地域の中で「チーム学校」を支え協働できる地域団体が育つ。 ⑦ コーディネートを専門とする地域団体が育つことで、子供たちの学びを核とした地域活性化につながる。 ⑧ 子供たちが、学校教育活動の中で多様な大人と触れ合うことで、地域内での防犯、防災対策にもつながる。学校外で子供たちを見守る大人が増え、子供の心身の健康にも寄与する。
平成 30 年度以降の活動計画	○‘志’教育（キャリア教育）コーディネーター育成講座の継続、定期開催 自主事業として実施できるよう、ノウハウの構築と仕組みづくりを行う。 ○受講生ネットワークの構築・定期的学習会の開催 受講後のアフターフォローとして、認定試験に向けた学習会や、互いに研鑽し合う情報交換や意見交換の場を創出する。 ○‘志’教育コーディネーターの育成や研修方法について提言 これから益々要望が高まるであろう、コーディネーターの育成のあり方について、関係機関へ提言し、予算化に向けて動く。 ○教育コーディネーターの組織化とネットワーク化 コミュニティスクールの設立と地域学校協働本部の設置が拡大し、地域学校協 働活動が今後益々、重要となってくる。社会教育法で地域学校協働活動推進員（コーディネーター）の委嘱が可能となったが、個人で活動し

	ているコーディネーターが、それぞれ集まり自立に向けた支援を行う。今後の教育界の動向を読みながら、コーディネーターの悩み相談や情報提供、地域学校協働活動や志教育（キャリア教育）の視点での人材育成を行うプラットフォーム機能を有する中間支援組織を立ち上げに向けて尽力する。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	被災地の復興・被災者支援に関して、 ☑Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業の受益者（被災者）へのアンケートにおいて、本施策で支援した取組について有益であった旨の評価をした受益者の割合が９割を超え、高い評価を受けた。 また、NPO 等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業により NPO 等が主体となった復興･被災者支援の実施に関わった団体数は７団体であり、取組の波及・継続に資するものであった。

（２）復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化

整理番号	（２）－１
事業名	NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業（マッチング・交流事業）
事業実施主体	□　県直営事業■委託事業（受託者：特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる）
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成２９年１１月９日～平成３０年３月２６日
事業内容とスケジュール	【目的】 NPO 等が企業や行政など多様な主体とともに継続して復興・被災者支援を行っていけるよう、それぞれの被災地における各主体同士の関係性を強化することを目的とする。 【実施内容・スケジュール】 企業・NPO・行政など震災復興支援の担い手となる主体同士が交流し、これからの震災復興支援を考えるための交流会を、以下の通り宮城県内の 3 地域（石巻市、気仙沼市、仙台市）において各 1 回開催する。 ①「復興」の先を考えるミーティング in 石巻～SDGs で見るわたしたちの地域社会～ 開催日時：平成 30 年 2 月 15 日（木） 開催場所：石巻専修大学 4 号館 4102 教室・4103 教室 ②「復興」の先を考えるミーティング in 気仙沼～SDGs で見るわたしたちの地域社会～ 開催日時：平成 30 年 2 月 19 日（月） 開催場所：気仙沼市役所 ワン・テン庁舎 大ホール ③「復興」の先を考えるミーティング in 仙台～絆力を活かした震災復興支援事業報告会＆交流会～ 開催日時：平成 30 年 3 月 15 日（木） 開催場所：せんだいメディアテーク オープンスクエア
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 3,733,560 円 （国費 2,489,040 円、県費 1,244,520 円）

	【内訳】委託費：3,733,560円
具体の成果	1　直接的成果 3回の交流会開催を通して、下記の人数の参加者が今後の震災復興支援について意見交換、情報共有することができた。 ①「復興」の先を考えるミーティング in 石巻～SDGsで見るわたしたちの地域社会～ 参加者数48名 （内訳：NPO21名（10団体）、行政12名、企業8名、個人2名、その他5名） ②「復興」の先を考えるミーティング in 気仙沼～SDGsで見るわたしたちの地域社会～ 参加者数56名 （内訳：NPO26名（10団体）、企業15名、行政9名、個人4名、その他2名） ③「復興」の先を考えるミーティング in 仙台～絆力を活かした震災復興支援事業報告会＆交流会～ 参加者数延べ357名 うち受付数106名 （受付数内訳：NPO62名（28団体）、企業21名、行政18名、個人3名、その他2名） 2　波及的成果 ・各交流会では今後の震災復興支援を考えるためのツールとして、SDGs（持続可能な開発目標）を紹介した。その結果、84.8%の参加者がSDGsに関する知識を得たことが参考になったと回答しており、これからの各地域における震災復興支援のあり方に進展が期待される。 ・「復興」の先を考えるミーティング in 仙台～絆力を活かした震災復興支援事業報告会＆交流会～では、平成29年度宮城県NPO等の絆力を活かした震災復興支援事業の報告会を合わせて実施した。その結果として、「NPO等の絆力を活かした震災復興支援事業」を今後も推進すべきというアンケート回答が多数（71.4%）を占め、「NPO等の絆力を活かした震災復興支援

<table>
<tr><td></td><td>事業」が一定の評価を得ていることを確認できた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価

（上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）</td><td>ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、
☐Ａ：特に優れた成果が得られた
☑Ｂ：優れた成果が得られた
☐Ｃ：一定の成果が得られた
☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた
☐Ｅ：成果が得られなかった</td></tr>
<tr><td>（上記評価の理由）
被災地において震災復興支援を行っている、もしくは関心のある NPO 等、企業、行政、一般市民などの多様な担い手へ、交流の機会提供ができたという点については参加者数・内訳、参加者の感想などから一定以上の成果があったものと評価する。さらに、各地の復興支援に新たに SDGs というツールを紹介した。これに対して参加者たちが今後の支援への応用可能性を見出していることから、今後の復興・被災者支援の取組の継続・発展に資するものであったと評価する。</td></tr>
</table>

（２）復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化

整理番号	（２）－２
事業名	NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業（情報収集・提供事業）
事業実施主体	□　県直営事業■委託事業（受託者：特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる）
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成２９年１１月１日～平成３０年３月３０日
事業内容とスケジュール	【目的】 現在復興・被災者支援活動している NPO 等が、この先も継続して支援ができるように、NPO 等がこれまで実施してきた復興・被災者支援活動の成功事例のヒアリングを通して、組織や資金作り、事業の展開など、今後の活動に役立つ情報を復興・被災者支援活動している NPO 等に提供する。 【実施内容・スケジュール】 (1) 情報収集事業 NPO 等が今後効果的に復興・被災者支援を行うため、被災地で NPO 等が実施・継続している復興・被災者支援に関するモデル事例や、NPO 等が多様な組織と連携しながら実施した復興・被災者支援に関するモデル事例を収集する。 実施期間：平成 29 年 11 月～12 月 (2) 情報提供事業 宮城県内において、NPO 等が効果的に復興・被災者支援を行うため、収集した情報を冊子『復興 ing』にまとめ紹介するほかに、web を活用して県内の NPO 等へ広く提供する。 実施期間：平成 29 年 11 月～平成 30 年 3 月 【冊子仕様（各号共通）】 判型：A4　ページ数：8 ページ　カラー：4 色　綴じ：スクラム製本 掲載事例数：3 事例

	●復興 ing vol.1 発行日：平成 29 年 12 月 14 日　発行部数：500 部 掲載内容： ・「地道な信頼構築がパートナーとしての関係性につながる」 NPO 法人ベビースマイル石巻 ・「育てる、食べる、活かす、をつなぎ『共生』を実践する牧場で雇用創出」 一般社団法人さとうみファーム ・「『理想＋効果の可視化』が外部支援・協働の鍵となる」 一般社団法人りぷらす ・専門家コメント「被災地でいかにソーシャル・ビジネスを継続させるか」 専門家：高浦康有氏（東北大学大学院経済学研究科准教授） ●復興 ing vol.2 発行日：平成 30 年 1 月 18 日　発行部数：600 部 掲載内容： ・「地域の宝はシニアの力　いきいきと活躍できる居場所であれ」 NPO 法人びば!!南三陸 ・「組織の舵を切ることでパートナーを見定めた」 一般社団法人 Bridge for Fukushima ・「食堂運営から地域コミュニティの拠点へ」 一般社団法人ワタママスマイル ・専門家コメント「復興支援 NPO が継続活動していくための 9 つの前提要件」 専門家：波多野卓司氏（中小企業診断士・経営コンサルティング波多野事務所代表） ●復興 ing vol.3 発行日：平成 30 年 2 月 20 日　発行部数：600 部 掲載内容： ・「震災後の市民による主体的なふるさとづくりを加速させるために」 NPO 法人石巻復興支援ネットワーク ・「スペインタイルで町を彩り、人を呼ぶ」 NPO 法人みなとまちセラミカ工房 ・「古民家の再生で地域の活性化」 NPO 法人中之作プロジェクト

	・専門家コメント「クラフト（工芸）としての復興戦略」 　専門家：高浦康有氏（東北大学大学院経済学研究科准教授） ●復興 ing vol.4 発行日：平成 30 年 3 月 29 日　発行部数：600 部 掲載内容： ・「戦略的な行政との連携策が、子どもたちを救う必要な手立てとなる」 　NPO 法人 TEDIC ・「必要な支援がなければみんなでつくり、制度へと昇華させる」 　NPO 法人エイブル・アート・ジャパン ・「森林資源は生業を作ることで自然の豊かさにつながる」 　NPO 法人吉里吉里国 ・専門家コメント「新たな価値を生み出す“ノットワーキング”」 　専門家：高浦康有氏（東北大学大学院経済学研究科准教授） ●WEB 掲載 下記、宮城県のポータルサイトへ各号発行後に PDF データを掲載。 PDF 掲載 URL： https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kyosha/fukkoing29.html （3）平成 28 年度・平成 29 年度宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業成果報告書作成事業 　平成 28 年度・平成 29 年度の宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業の成果をまとめ、その有効性を広く周知するために成果報告書を作成する。 実施期間：平成 30 年 2 月～3 月 【報告書仕様】 判型：A4　カラー：4 色　ページ数：36 ページ（表紙含む）　綴じ：中綴じ製本　部数：300 部
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 2,998,728 円 （国費 1,999,152 円、県費 999,576 円）

	【内訳】 委託費 2,998,728 円
具体の成果	・震災復興支援を行う１２３団体に対し、情報提供を行った。 ・これまで震災復興支援を行う NPO 等の活動の継続性に焦点をあて、そのモデルケースを抽出し、かつ、読みやすいボリュームにまとめた印刷物はなく、８割を超える回答者が、今後の震災復興支援活動に「大変参考になった」または「参考になった」と答えた。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☑Ｂ：優れた成果が得られた ☐Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　震災復興支援に取り組む NPO 等１２３団体に情報提供を行い、アンケート回答者の８割から参考になったとの回答を得たことから、今後の復興・被災者支援の取組の継続・発展に資するものであったと評価する。

（２）復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化

整理番号	（２）－３
事業名	宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業受益者アンケート業務
事業実施主体	□県直営事業　■委託事業（受託者：特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンター）
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成２９年９月２７日～平成３０年２月２８日
事業内容とスケジュール	・事業内容 　宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業（以下「本事業」）では、ＮＰＯ等の非営利活動団体が行っている被災地の復興や被災者支援の活動を支援している。 　本事業を活用して行われている復興・被災者支援の活動について、活動を通じて支援を受けられた方（受益者）を対象としたアンケートを実施し、受益者の方々が支援を受けられたことによる効果等を把握するもの。 ・スケジュール 補助事業実施団体からのアンケート提出期限：平成３０年１月３１日 アンケート集計・県への報告：平成３０年２月２８日
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 199,800 円 （国費 133,200 円、県費 66,600 円） 【内訳】委託費：199,800 円
具体の成果	補助事業実施団体（１４団体）が実施した受益者アンケート（各３０部程度）を取りまとめることにより，受益者の方々が支援を受けられたことによる効果を可視化した。
評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、 □Ａ：特に優れた成果が得られた □Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた □Ｄ：限定的であるが成果が得られた □Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　ＮＰＯ等の復興･被災者支援の活動に関する効果を可視化したことにより，今後のより効果的な事業実施に資すると考えるため。

（２）復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化

整理番号	（２）－４
事業名	宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業審査委員会ほか
事業実施主体	■県直営事業　□委託事業
支援対象者の概要	宮城県内で震災復興に取り組むＮＰＯ等の支援団体
実施期間	平成２９年５月１日～平成３９年３月３１日
事業内容とスケジュール	・事業内容 各支援事業に係る支援の対象となる取組の選定 各支援事業に係る進捗状況の把握及び評価 ・スケジュール 第１回 〇開催日：平成２９年６月５日 〇議題：宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業（補助事業）の審査 〇概要：応募のあった事業のうち、１次審査を通過した事業について、応募団体からのプレゼン形式で審査を行い、支援対象事業を選定したもの。 第２回 〇開催日：平成３０年３月１５日 〇議題：補助事業実施団体からの実績報告及び委員による講評 〇概要：平成２９年度の補助対象事業について、団体からの実績報告を受け、審査委員により講評を行ったもの。 その他 〇各支援事業に係る中間報告に基づくヒアリング等
事業費とその内訳	【事業費】 総事業費 189,332 円 （国費 126,221 円、県費 63,111 円） 【内訳】 報償費 150,800 円、旅費：6,452 円、消耗品費：32,080 円
具体の成果	・学識経験者、NPO 等、金融機関、税務・会計の専門家から構成する審査委員会を設置し、支援事業の選定・評価を行うことで、補助事業の公平かつ効果的な実施に資するものとなった。 ・各支援事業に係る中間報告に基づくヒアリング等を実施し、補助事業の適切な執行に資するものとなった。

評価 （上段の該当する評価にチェックを付け、下段にその理由を記載してください）	ＮＰＯ法人等の絆力強化に関して、 ☐Ａ：特に優れた成果が得られた ☐Ｂ：優れた成果が得られた ☑Ｃ：一定の成果が得られた ☐Ｄ：限定的であるが成果が得られた ☐Ｅ：成果が得られなかった （上記評価の理由） 　補助事業の公平性が担保されるとともに、各支援事業が適切に執行され、受益者より一定の評価を受けたため。

３．審査委員会の開催結果

（１）審査委員会の名称

宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業審査委員会

（２）審査委員会の役割等

① 役割

・各支援事業に係る支援の対象となる取組の選定

・各支援事業に係る進捗状況の把握及び評価

② 位置づけ

・担当部の私的会議（任命者：宮城県環境生活部長）

（３）審査委員会委員の構成

石井山　竜平　東北大学大学院教育学研究科准教授（学識経験者）

高力　美由紀　宮城大学事業構想学部事業構想学科准教授（学識経験者）

加藤　房子　宮城県生活協同組合連合会常務理事（ＮＰＯ等）

大和田　学　（社福）宮城県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉課みやぎボランティア総合センター所長（ＮＰＯ等）

志間　俊雄　仙台商工会議所理事兼事務局次長（企業・経済団体）

松重　有祐　日本政策金融公庫仙台支店東北広域営業推進室長（金融機関等）

橋本　潤子　橋本潤子会計士事務所　代表（会計専門家）

（４）今年度の開催結果

第１回

〇開催日：平成２９年６月５日

〇議題：宮城県ＮＰＯ等の絆力を活かした震災復興支援事業（補助事業）の審査

〇概要：応募のあった事業のうち、１次審査を通過した事業について、応募団体からのプレゼン形式で審査を行い、支援対象事業を選定したもの。

第２回

〇開催日：平成３０年３月１５日

〇議題：補助事業実施団体からの実績報告及び委員による講評

〇概要：平成２９年度の補助対象事業について、団体からの実績報告を受け、審査委員により講評を行ったもの。

４．全体評価

本事業では、被災者の心のケアやコミュニティ形成支援、中間支援等の１３の取組に対し補助金を交付するとともに、絆力を強化するための３事業を委託により実施した。

補助事業においては、各補助事業実施団体が、それぞれの活動地域や被災者のニーズにあったきめ細かな取組を展開した。この成果は受益者アンケートに現れており、ＮＰＯ等の取組から受益者が受けた効果の度合いについて、８割超える受益者が「改善した」又は「どちらかといえば改善した」と回答し、今後も継続して NPO 等の支援を受けたいという問いに対しても、９割を超える受益者が「そう思う」と回答している。また、補助事業実施団体のほか６３団体の参画があり、復興・被災者支援の取組の波及、継続に資するものであったといえる。このことから、本事業について一定の成果があったと評価する。

復興・被災者支援を行うＮＰＯ等の絆力強化事業においては、延べ１７１団体に対し支援を行い、交流機会の創出や復興・被災者支援の継続のための情報提供を行った。マッチング・交流事業では、SDGs の視点から復興・被災者支援を考え、８割を超える参加者が参考となったと回答した。また、情報収集・提供事業では、８割を超えるアンケート回答者が、今後の震災復興支援活動に「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。このことから、今後の復興・被災者支援の継続・発展が期待されるとともに、一定の成果があったと評価する。

一方で、今後求められる支援内容や課題も明らかとなったことから、今後も必要とされる支援を継続しつつ、NPO 等との協働による課題解決を図っていく。